昭和48年3月25日発行通巻105号(毎日曜日発行) 昭和48年1月12日国鉄首都特別扱承認雑誌第1245号

朝日=ラルース

3/25
220円
104

週刊 世界動物百科



朝日新聞社

読者のみなさまへ

こんな動物が登場します　この〝百科〟は動物を機械的に50音順に並べたものではありません。系統だった分類に従い，次のような順序と冊数でお届けしております。概説（２），哺乳類（62），鳥類（64），爬虫・両生類（16），魚類（16），軟体動物・昆虫類・甲殻類・腔腸動物などの無脊椎動物（32）。現在，哺乳類が終了し，65号から鳥類が続々と登場しています。《１～128号の内容は表３参照》

総目次と総索引がつきます　見て，読んで，楽しむ〝百科〟としてだけでなく，引いて調べる〝事典〟としての機能を完全にするため，16冊ごとに総目次，64冊ごとに収録類別の索引をつけ，また最終の192号には詳細な総索引をつけます。

「私たちの仲間」のページ　第一線動物学者の執筆による解説と注があります。また〝動物週刊誌〟として，ニュースや話題，楽しい読物，ペット相談などを掲載しています。

ファイルで保存してください　全192冊を発行順に16冊ずつ，美しいファイル（定価600円）に，とじこんでください。堅牢豪華な〝動物百科事典〟全12巻がそろいます。なお，バックナンバーのお求めは，表３「本誌の購読について」をごらんください。

目　次

世界動物百科　第104号

カラーページ

私たちの仲間

監修　森岡弘之（国立科学博物館研究官）
翻訳　島津　智（翻訳家）

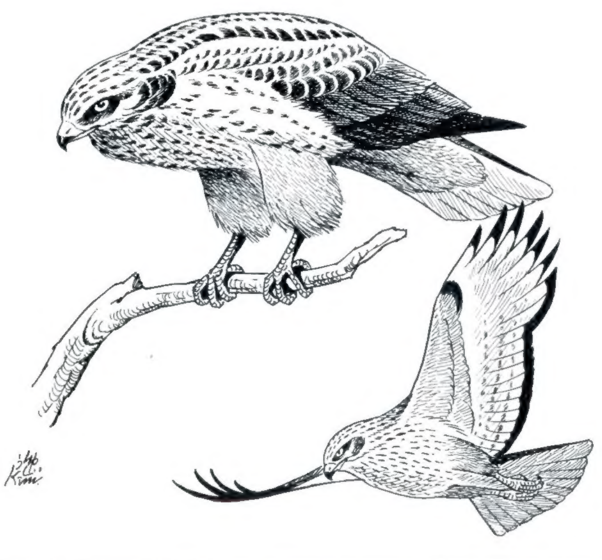
凡　例

□本文中〔　〕を使ったものは，日本版のために付加した説明である。
□くわしい注釈が必要な語には，〔注１〕と番号を入れ，「私たちの仲間」第27ページに，同番号で記載した。なお末尾にページ数（上両端）を付記した。
□動物の種名は，原則として和名（一般に通用している外来語を含む），学名（イタリック）の順で表記した。和名の多い場合，併記しているものもあるが，専門家と協議し，編集部で決定した。和名のないものは，英語名または仏語名をカナ書きで入れ，原語（ローマン）を付記した。
□人名，地名は，本人または現地読みを原則としたが慣用の固定しているものは，それに従った。

◆日本迷鳥録◆38

オオノスリ

Buteo rufinus



文　内田康夫
え　木村しゅうじ

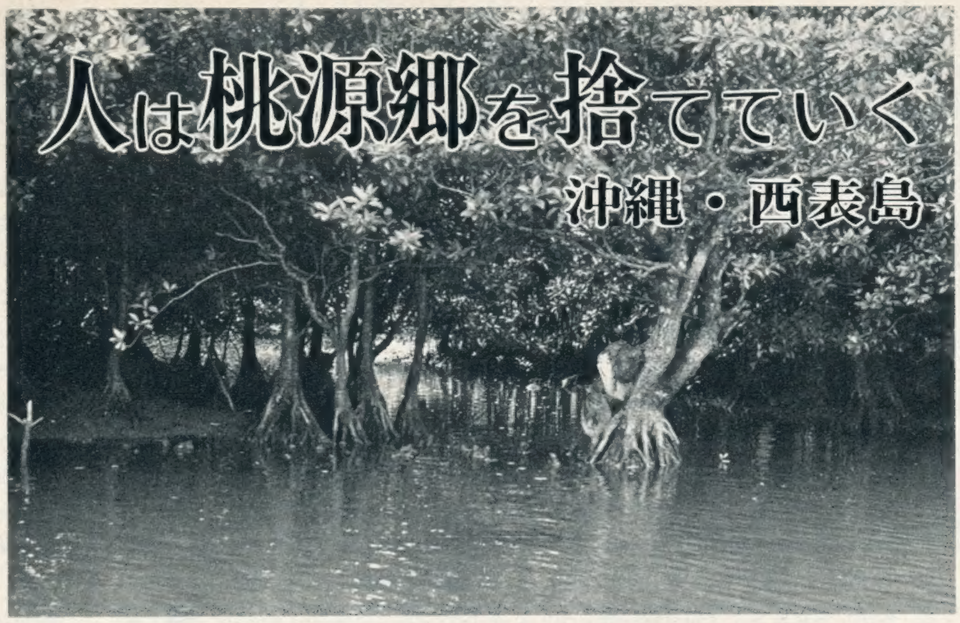
人それぞれ顔が違うように，動物も個体ごとに少しずつ違っている。この現象を個体変異というが，体色上の変異は目につきやすい。もちろん，変異の認めにくい種から，片やまっ白,片やまっ黒といった個体を含む種までいろいろな段階がある。ワシタカ類は変異の大きいグループだが，なかでもノスリ類で著しい。ところが，ノスリ類は種内での変異が大きい一方，種間の差違が少なく，したがって分類はやっかいなことになる。

オオノスリは，全長61～66センチ，ノスリより大柄で，白っぽい個体から黒っぽい個体まである。北アフリカ,東南ヨーロッパ，イラン周辺,中国西部，チベット，モンゴル，バイカル湖周辺まで分布するが，西部型と東部型に分かれ，両者はテンシャン（天山）山脈からモンゴルにかけての地域で共存しているため，学者によっては東部型を *B.hemilasius* として別種にする。日本では対馬に迷行した記録以外は確かなデータがない。■

私たちの仲間
104号…3月25日

自然と人間

人は桃源郷を捨てていく
沖縄・西表島



無気味なふんい気を漂わせる仲間川のマングローブ林 この林は5キロにもわたたる

自然保護・野生生物保護についての関心は，この数年にわかに高まってきました。それにもかかわらず，現在わたしたちのまわりの自然は守られているでしょうか。答えは，はなはだ悲観的なのですが，その理由を考えるとき，わたしたちはたちまち自分自身の生活に目を向けなければならなくなります。

沖縄本島の西南432キロ。日本最南端に近く，八重山群島の西表島がある。輝く太陽と島の緑，サンゴ礁と海の青さ。そこには，煙とコンクリートのなかに明け暮れる都会の人が，一度はいってみたいと夢みる広大な自然が，ひっそり息づいている。

しかし，島の人たちは，この桃源郷を惜しげもなくかなぐり捨てて，ひとり，またひとりと都会の砂漠をめざしていく。

何が島民をそうさせているのだろうか。そんな気持を抱いて島に向かったのだが，そこで見たものは，かたくななまでに〝人間〟を拒みつづける目がくらむほどの〝自然〟だった。

沖縄・那覇から石垣島まで飛行機で1時間。石垣島からホバークラフトに乗り約30分で西表島に着く。だが，その日はあいにくホバークラフトが故障しており，20トンたらずの荷物運搬船に乗りこむことになった。

ポンポン船は，白い波をけたててサンゴ礁のあいだを縫いながら，約2時間かかり西表島の東海岸・大原の港に着いた。港といっても，自然の地形を利用し，そこに簡単なコンクリートの船着場があるだけで，わらぶきの待合小屋が，強い日ざしのなかにぽつねんと立っていた。

おびただしい荷物の山をかき分け，貝殻の混じるだんだら坂を登ると小さな部落があった。道路に人影はない。サンゴ石の垣やブッソウゲ（ハイビスカス）の花に囲まれた赤いかわらぶきの家が，こじんまりとかたまっている。大原部落。人口約600，西表島最大の町である。

東海岸側には，このほかに4つの部落があるが，人口は全部合わせても1500人に満たない。20キロ近くにおよぶ海岸道路沿いに，小さな部落がポツン，ポツンと点在している。

マングローブの林

そのひとつ，大富部落の旅館に着いたのは昼下がりだった。まだ荷物も解かないのに，久しぶりのお客に上きげんの旅館の主人は，前歯のすっかり抜け落ちた口を精いっぱいあけて大声でいった。

「仲間川を見るなら早よいかんと，潮がひくと上のほうまでいかれんよ」

島には，大小合わせると約30の川がある。どの川も長くはないが，川幅が広く水量も豊富である。しかし，河口から中流にかけては潮の満干の影響をもろに受け，干潮になると上流まで舟が上がれないのである。

仲間川は御座岳（420メートル），南風見岳（425メートル）の連山からの水を集める，延長約16キロの東海岸最大の川である。旅館から河口まで急な坂道をおり1分たらず。小さな入り江には数隻の小舟がつないであり，日焼けした老人が網の手入れをしていた。そのうちのひとつ，土地の人がサバニと呼ぶくり舟に乗りこむと，舟は重心を失って左右に大きく揺れた。サバニとは一種の丸木舟で，島の人はこの舟で沖合いにまで漁に出かける。

舟はゆるやかにカーブしながら，川をさかのぼっていった。川面でボラが何度も音をたててはねた。

12月中旬だというのに，色とりどりのチョウ（蝶）が群れて飛び，ときどき顔にぶつかってくる。両岸はマングローブの原生林。マングローブは，泥地にはえるオヒルギ，メヒルギなどからなる特殊な灌木林をいうのだが，その泥地は，満潮時にはたっぷりと水をたたえた川底になり，潮がひくと陸地になる。いけどもいけどもマングローブの林。このなかに迷いこんだら最後，二度と外へは出られないという。タコ足状に幾本にも分かれた根は，地表面に露出したり水中に没したりしている。ずっと以前迷いワニが住みついていたという話を聞いたが，マングローブのあいだから，今にもワニがざんぶと身をおどらせてきそうな無気味さをたたえている。5キロほど上ると川幅はしだいにせばまり，マングローブの林もまばらになって，アダン，ミミモチシダ，ヘゴなどが見えはじめた。遠く御座岳の斜面に，ヤエヤマヤシが群生するのが望まれる。

「きのう，あそこの木にカンムリワシがおったんだがネ」

船頭さんが指さしたウラジロエノキはなるほど威厳を秘めたカンムリワシに似合いそうな枝ぶりをしている。カンムリワシは昨年，沖縄復帰と同時に国の天然記念物に指定された珍鳥だが，船頭さんの話ではまだかなりの数がいるらしい。しばらく待ってみたが姿を見せない。イシガキヒヨドリ，オサハシブトガラスの声を聞きながら，しだいに潮のひいていく川を下った。

イノシシ猟にいく

西海岸に渡る予定の朝，暴風雨に見舞われた。雨風は，海からもろに吹きあげてくる。西海岸にいくには，山越えをするか，一度石垣島まで引き返して1日おきに出る船に乗りかえなければならないのだが，船はもちろんストップ。山越えといっても，イノシシが通る小道があるだけで，ちょっと暖かくなるとサキシマハブ，ヤマヒルなどが活動を始める。気まぐれな旅行者や調査の人が案内を雇って利用することはあるものの，一般の者たちにはちょっと無理。かといって，旅館にじっと足どめを食うのもつまらない。宿の主人に相談してみると，

「そんなら，イノシシ狩りでもやってみるかネ」

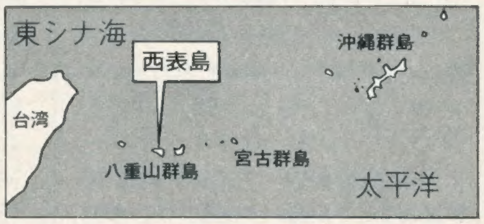
やがて主人は，ひとりの男を連れてきた。高江州元徳さん（45歳）。イノシシ狩りの名人だという。

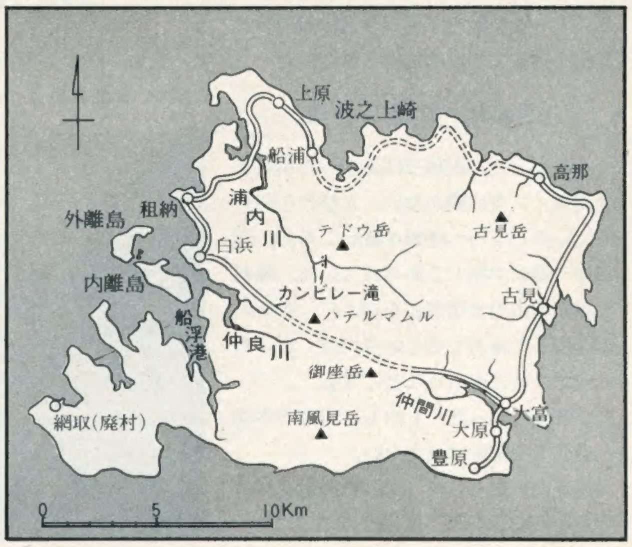
島には約5万頭のイノシシがいるといわれ，猟期になると，島民はわなをしかけてイノシシをとる。むかしは落し穴でとっていたが，今はもっぱら台湾からはいってきたはねわなだ。イノシシの通り道にしかけ，イノシシがそれを踏むと糸があしをがっちりとらえて宙づりにする。

「ときどき，イリオモテヤマネコがかか

西表島

西表島は北緯24度15分～25分東経123度40分～55分に位置する南海の孤島






操業を中止した大原の精糖工場 煙突からわきたつ煙は島のシンボルであったのだが……

って死んでいることもありますヨ」

高江州さんはこともなげにいってのけた。イリオモテヤマネコといえば、ネコの仲間ではもっとも原始的な種に属する世界的な珍種なのだが、その学問的な価値など、島の人びとに関心はなさそうだ。

この日のイノシシ狩りは、もっとも原始的な方法がとられた。イヌを使ってイノシシを追いつめ、かみ殺させてしまうのだ。

雨はとめどなく降ってくる。東京の雨と違って激しく木の葉をたたき、大地を洗う。耳をすますと、単調な雨の音が連続音になって、からだごと吸いこまれていくような錯覚にとらわれる。宿を出るとき、完全武装はしていたものの、2時間近く歩いて御座岳の中腹まできたころには、全身ぐしょぐしょになっていた。頭上にうっそうと枝を張ったイタジイやオキナワウラジロガシ。巨木の幹にびっしり根を張ったシマオオタニワタリ。地表にはシダ類がおい茂り、歩くたびに音をたてて折れる。そのたびに小さなトカゲ類があわてて逃げていく。

高江州さんが飼っている雑種犬2頭は、ときどき吠え声を響かせ、においをかぎ分けながら右に左に走る。強い風雨のため、イノシシのにおいがかき消されてしまったのか、1時間たってもまだ見つからない。と、はるかふもとのほうで激しいイヌのほえ声を聞きつけた。「ソレッ！」とあとを追う。突然、イヌの2倍もありそうな黒いかたまりが、20メートルほど先を地響きたてて横切った。10秒遅れてイヌが追いすがる。が、やがて、イヌたちはしょんぼりと主人のもとに引き返してきた。逃げられたのだ。

西海岸への道なき道

2日たった。雨はほぼあがったが風がまだ強く、舟は動かない。しびれを切らしているところへ朗報が舞いこんだ。西海岸へ渡れず閉じこめられていた、那覇営林署の山川元英課長を迎えに、北海岸の高那まで舟がくるというのだ。さっそく便乗させてもらうことにする。

高那までいった。しかし、約束の時間が過ぎても舟影は見えない。

「波が高いから、やっぱり舟を出せんのでしょうな」

山川さんは海を見やりながらあきらめの表情をした。結局ふたりで、海岸沿いに歩いて西海岸までいくことになる。干潮時を過ぎ、潮は少しずつ満ちている。砂浜には、一面にカニの穴があり、チドリの群れがせわしげに歩きまわる。小さな入り江には、シラサギやクロサギが数羽の群れをなし、人のけはいに驚いて飛びたち、はるかかなたのサンゴ礁の浅瀬に舞いおりる。サンゴ礁は延々と続き、数キロ先で白い波をたてている。

やがて川にぶつかった。橋などあろうはずもない。ズボンのすそをまくってはみたが、結局腰までつかった。すぐそばのマングローブの林から、カモの大群が羽音もけたたましく飛びたった。マングローブ林は、カモやサギのすみかなのだ。砂浜には色とりどりの貝殻に混じって、これまた色美しい熱帯魚やイカが打ちあげられている。手にとってみるとまだ新鮮だ。山川さんが横から声をかけた。

「気温が急に下がると、魚が死んで打ちあげられることがよくあるんですよ」

なるほど、島に着いた日は、真冬だというのに気温が30度近くあり、夜は蚊に悩まされたが、風雨になると急に15度くらいにまで下がった。この天気の急変にやられたらしい。

西表島の気温は、1年を通してそう大きな変化がなく、年平均気温は23〜24度である。7月には最高35度くらいまでになるが、いちばん寒い1月でも、10度以下になることは珍しい。

歩きはじめてもう3時間になる。ことばも少なくなり、ただ黙々と歩く。

さらに1時間も歩いただろうか。波之上崎にさしかかったころ、舟の音が聞こえた。時間に遅れた舟が、わたしたちを捜しながら引き返してきたのだ。ふたりが乗りこむと、サバニはエンジンの音を響かせて西海岸の上原に向かった。海水は、今度は頭から降りそそいだ。ヤッケを着ていたが下着までずぶぬれ。波は荒く、しばし宙に浮いたサバニは「バチッ」と激しい音をたてて海面に落ちた。

きびしい自然に敗退

ところでこの西表島では、ここ数年来、なだれのように過疎化が進行している。人口の推移をみてみると、1962年には3636人だったのが、1965年には3367人、1968年には2876人、そして1970年には2620人と驚くほどの減少ぶり。現在、島にはほとんど年寄りと子どもだけしか残っていない。

島の人たちの生活をささえているのは、パイナップル、サトウキビと稲作である。八重山支庁や竹富町が、パインやサトウキビの栽培を奨励しはじめたのは1949年ころからだ。第二次大戦で、日本がそれまでの産地だった台湾を失ったこともあり、1951年に本土との貿易が開始されると、換金作物としてひときわ注目をあび、その栽培熱は急激に高まっていった。パインやサトウキビの好む酸性の土壌の西表島は、山を開墾さえすればいくらでもできるというので、沖縄や近くの島々から次々と人が移り住み、原生林は切り開かれ、みるみる畑に変わった。そして、1957年には大富に、1960年には上原にパインのかんづめ工場が建設された。また1960年に大原、1963年には上原に精糖工場も建った。耕地面積も順調にのび、サトウキビの場合、1957年に全島で約60ヘクタールだったものが、1965年には270ヘクタールにも達した。

島の農業は、稲作を加えてそのまま定着するかに見えた。しかし、島の自然はその息をのむ美しさとは裏腹に、人間が考えるほど甘いものではなかった。人びとが耕地面積を拡大すればするほど、カラス、イノシシ、野ネズミなどの野生鳥獣の被害が大きくなっていったのである。加えて、毎年のように襲ってくる台風、干魃による被害。とくに昨年(1972)、一昨年の大干魃は、島の住民の息の根を止めた。

日照りが続き、作物が生気を失ってしおれはじめると、人びとは台風を待ちこがれる。強風で作物がなぎ倒されるほうが、水不足で全滅するよりまだましなのである。やがて待ちに待った台風がやってきた。しかしその台風も、雨を伴わない〝風台風〟で、塩分を多く含んだ強風は、息も絶えだえの作物に吹きつけるだけだった。このような被害の繰り返しなのである。工場も上原のパイン工場を残して全部操業を中止してしまった。

かつての島津藩による人頭税制度やマラリア、強制移民などで代表される島の長い苦悩の歴史から解放された人びとは、自力で、明日への希望を見いだそうと汗を流してきた。しかしその努力も報われぬまま、借金をかかえこんだ人びとの心はしだいにすさんでいった。イノシシ狩りに案内してくれた高江州さんもそのひとり。今は手入れをする人もなく、荒れた畑地に自生するサトウキビを見やりながら、さびしくいうのである。

「戦前には一時、石炭ブームにわいたこともありましたが、戦後のこの開拓時代ほど活気に満ちたことはなかったでしょう。たった1台しかないブルドーザーを皆で奪いあうようにして、山を切り開いたもんですよ。でも、もう農業はやりません。借金がふえるばっかりです。あとは自分で開墾した8町歩ばかりの国有地が私有地化するのを待って、それを売り、石垣なり、本島なりに渡るだけです」

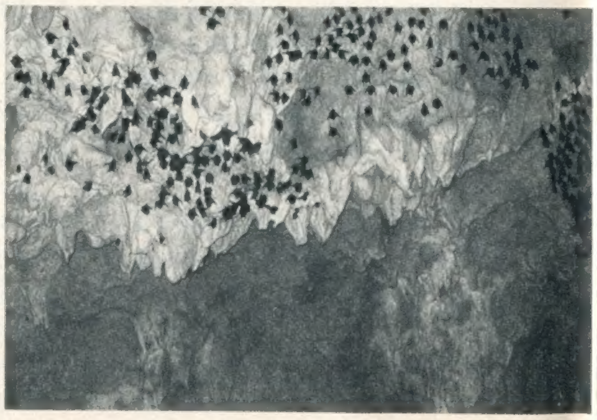
高江州さんの今の収入は、日雇い労務などで得る月4万円たらず。島の4万円は、都会と違ってかなりの価値があるとはいえ、これではじゅうぶんな生活ができるわけがない。島のほとんどの人たちが、高江州さんと同じ程度の収入なのだ。

島の中学校を卒業した子どもは、競って石垣島の高校にはいる。そして高校を卒業すると、もう島に帰る者はいない。沖縄本島、日本本土へと働きに出るのだ。西表島に帰っても仕事はない。農業は老いた両親にまかせ、やがて一本立ちした子どもは島から親を呼び寄せる。

新聞がくるのは1日遅れ。少し海が荒れると1週間分が1度にどさりとくる。買物だっていちいち石垣島まで出かけねばならない。簡易水道はあるものの、雨が降るとどろ水になり、木の葉などがつまって水も出なくなる。島民にとって、見た目にはいくら美しい自然でも、生活の不便さを考えあわせるとき、決して魅力的ではないのだ。

こういった状況のもとに、1971年8月、南海岸の網取部落が自然廃村になった。東側の古見部落も、現在人口100人を割った。ここ10年間に、約3分の2の人たちが、部落を捨てて島を去ったのである。古見小学校の根本盛吉校長も、も


道路建設のため見るも無残に切りきざまれた亜熱帯原生林 土砂は川に流出し魚貝への影響も出はじめている（御座岳付近）


島のあちこちの洞窟のなかにはおびただしい数のヤエヤマキクガシラコウモリが冬眠していた（大富）

うどうしようもないといった感じをこめていう。

「今，全校児童数は280名。本年(1972)の新入生は2名でした。部落にはこれから子どもを産める年齢のおとなは，もう残っていないでしょうね」

開発は島民を利するか

過疎化をくいとめるための対策が全くないわけではない。たとえば，東海岸と西海岸を結ぶ全長25.16キロの横断道路建設。さらには本土復帰記念行事のひとつとして始められた，高那から船浦にぬける北回り沿岸道路建設など。

横断道路のそもそもの目的は，ほとんど金にならない島の原生林を伐採して，かわりにリュウキュウアカマツへの林種転換を図るための林道なのだが，そのほかにも多くのメリットをもたらしてくれるはずなのだ。島民たちは期待をこめていう。

「島にきて20数年にもなりますが，わしらは西側にはまだ一度もいったことがありません。島がふたつあるのと同じです。横断道路ができれば，東と西の行き来ができ，かんづめ工場にしてもその原料のサトウキビやパインの運搬が自由にでき，より大きな工場で，もっと効率のよい操業ができるようになるでしょう」(大城久善氏・農業・豊原)

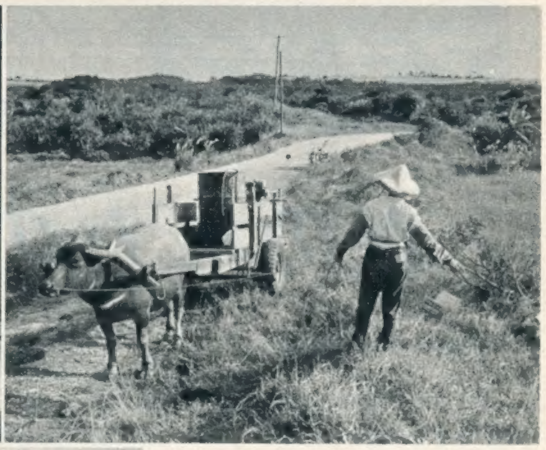
「観光客もずいぶんくるようになったのですが，これまでは東海岸だけ見て，日程のつごうでそのまま帰っていく人も多いんです。でも道があればすぐ西海岸へいけるし，その途中からは，原生林や海が見おろせるし，観光ブームも夢でなくなるんでは……」(竹盛一洋氏・旅館主・大富)

「今，島にはお医者さんがひとり。それも大原でしょ。こちら側で病気にでもなろうものならたいへんです。天気が悪いと石垣までは船は出んし，大原へは山越えせにゃならんし。網取の廃村はこのことも原因しているんですから。道路を期待するのは当然でしょ」(星　勲氏・農業・租納)と。

島への企業誘致の話もある。南海岸に船浮湾という2000トン級の船が自由に出入りできる良港があるが，本島の大手漁業会社がこの港を拠点にして，魚肉のかんづめ工場をつくるという。つくったかんづめは，横断，沿岸道路を通って東側に送りこみ，そこから石垣島や沖縄本島，日本本土へ運ぼうという胸算用。

しかし，4年前に着工した肝心の道路建設は，約3分の1を完成したところで，現在労働力の不足のためほぼ中止の状態になっている。せっかくよそから集めてきた労務者も，飲み屋やパチンコ屋などの娯楽施設ひとつない島では，ひと月ももたないのだ。






周囲の海は魚の宝庫だが，仕掛け網で漁ができるのは12月から2月までの間だけ。春先からは海水がぬるみ，せっかく網にかかった魚も夜の間に腐ってしまう。朝早く網を引きあげ入り江に帰ってきた舟に，近くのおかみさんがきて，30センチもあるチヌやボラを1匹100円で買っていた。

魚のいっぱいいる海に囲まれながら，漁業で生活できない島民の，頼みの綱は農業。その農業の見通しも決して明るくないが，それでも人びとは畑にしがみつかねばならず，スイギュウに車を引かせて畑仕事にいそしむ。真昼の部落には人影もなく，ただひっそりと静まりかえっていた。

「どうせヤマトに帰って，笑いもんにするんじゃろ」といいながらも，こころよく写真を撮らせてくれた。麻で編んだかごは，石垣島のみやげ店に出すのだという。

この種の開発により，地元の人たちの期待が実現するかどうかには疑問がある。企業が誘致されても，オートメ化された工場が，過疎をくい止める原動力になり得るだろうか。結局は熟練工が，本土から送りこまれることになるのではないか。観光開発について，西表島測候所所長大仲浩夫さんはいう。

「旅館業者などの，一部の関係者はもうかるでしょうが，農民までその恩恵がおよびますかネ。むかしの炭鉱ブームのときだって，島民は店ひとつ出すことすらできなかったというんですから。みやげ屋の売り子やホテルのボーイの働き口では，過疎は防げんでしょう」

〝住民移住〟という解決策

そして一方，日本生態学会をはじめ，自然保護を訴える人たちは，無計画な西表島開発に反対する。自然の破壊により，人の手が加えられずに残された亜熱帯林やさまざまな貴重な動植物が失われることを心配しているのだ。

「ヤマネコと人間とどちらが大事なんですか。ヤマトンチューは，わたしたちを野蛮(やばん)人だと思っているんでしょうけどね」(大城久善氏・農業・豊原)という非難は地元民には当然ある。しかし開発が島民の利益にあまり関わりがなく，本土の一部業者の利益のみにつながるとすると，その代償として失われる自然は，あまりにも大きすぎはしないだろうか。

日本復帰に前後して島を襲った土地ブームは，住民の生活を混乱に陥れた。はじめ3.3平方メートル（1坪）180円だったのが，3か月とたたぬうちに一気に1200円にはね上がったという。都市に住む人とちがって土地に対する価値観がごく薄い島の人たちは，西表島の国立公園指定をあてこむ土地業者，地元有力者などの巧みな話術に翻弄(ほんろう)されながら，喜んで土地を手放し，現在，全島の約10パーセントという私有地のほとんどが業者の手に渡ってしまったという。広い土地を持ち，それを売ることでまとまった金を手にした人たちは島を離れ，他に土地を求めることができ，島から脱出したいという念願を果たした。しかし，わずかな土地にしがみつき，細々と暮らしてきた人たちにとって，ひと握りの金で土地を手放したあと，何が残されただろうか。

自然保護派のひとり，日本野鳥の会の蓮尾嘉彪さんは主張する。

「人間は今，欲望のおもむくままに，地球規模での自然破壊をすすめている。しかし，地球の100パーセントを人類のためのみに使ってよいものだろうか」と。

蓮尾さんは，それを人間の思いあがりだと非難する。

「少なくとも，人間が使ってよい《人間の領域》と，動植物のための《自然の領域》をぴしっと決めておく必要があるのではなかろうか。西表島の場合，狭い日本では，まだ自然がそっくり残っている数少ない地域だし，学術上の研究材料としても開発を見合わせるべきだ」

そして次のように提案する。

「問題は島民の生活だが，行政的に島ぐるみの移住を考えてはどうだろうか。日本の本土には，過酷な自然条件の西表島よりまだ生活しやすいところが，たくさんあるはずだ。膨大な費用をかけて開発をするより，それだけの費用を移住に回したほうが，長い目でみれば，島民のためにも自然保護のためにも得策ではないのか」

島ぐるみの移住は，島民の生活習慣などの問題もあって，すんなりとは運ばないだろうが，ともかくここらあたりで一歩立ちどまり，発想の転換をしてみることも必要のようだ。

1960年に日・米・琉球政府の三者で〝西表島総合開発計画〟というのが構想され，これについての共同声明も出たが，あまりにも膨大な費用がかかるため立ち消えになったという前例もある。

西表島と同様に，全国各地でいま過疎化が進行している。現在では自然のふところにいだかれて生きるということは，むしろ人間にとって苦痛である。もちろん，これは現代だけの現象ではないという人もいるだろうが。

西表島民が口にした，あきらめにも似た悲しいことば〝シマチャビ（離島の生活苦）〟は，無垢(むく)なる自然がわたしたちの手に負えず，それだからこそ，このような場所に光り輝きながら生き残っているのだという歴史の証言なのでないかと思われる。そうして，わたしたちは自然を胸の内からも，いつしか追いだしてしまったのではないか。

自然保護というが，その〝自然〟とは，どのようなものをいうのだろう。■

（八尋記者）

アマゾン動物記 16　伊沢紘生

森のなかのにおい


タイラ

≪動物たちの腐肉臭≫

アマゾンの森林を注意深く歩いていると，ときどき変わったにおいにはっとさせられることがある。その場合，森林のなかは風の流れがほとんどないので，かいだにおいの正体をつきとめることはわりあい容易である。めったにないことだがたまに動物の死体があると，吐きけを催すような腐肉臭があたり一面に充満している。大型の動物の場合はとくにひどい。また動物でも，けものの腐肉臭と，大きな陸ガメやヘビの腐肉臭とは異なっている。爬虫類の場合には，けもののそれに金属の錆のにおいのようなものが加わったようなにおいに，わたしには感じられる。

カグワン河の森林へ予備調査にいったとき，案内人のヒルベルトは森をはう小川にいた大きなデンキウナギとシビレエイを棒で突き殺し，ジャガーやオセロットのえさとして森のなかのけもの道へ置いたことがあったが，魚類の腐ったにおいは，けものや爬虫類のそれとはまた異なった，あくどい生臭さが加わったにおいだった。森のなかの沼などが干上って魚が死ぬこともときにはあるだろうが，そういうのろまな魚が少ないのか，魚が死んでもそれをすぐにあさってしまう動物が多いのか，わたしは，人為的ではない魚の腐ったにおいを森のなかで一度もかぐことはなかった。

それらの腐肉臭は多くの場合，もうひとつ別のにおいと混合される。それはハゲタカが樹上からこき，林床や下ばえの葉の上に散った白いふんのにおいである。この悪臭はことばではうまく表現できないが，動物の腐肉臭が胸にむかっとくるにおいなら，これは頭にツンとくるようなにおい，とでもいったらよいだろうか。

≪体臭をかぎわける≫

クチジロペッカリーが興奮したり，緊張したりしたときに背中にある腺から出す，動物園のタヌキ舎のにおいに似た悪臭は一度かいだら絶対に忘れることのないにおいである。クビワペッカリーも同様の分泌腺を持っているが，そのにおいはずっと弱い。そしてどちらかというとブタのにおいに近い。わたしは森のなかで両者のにおいをわりあい簡単にかぎ分けられるようになった。

ホエザルはニンニクに似た独特の体臭があり，アメリカの学者が現地でホエザルの群れを追跡するとき，このにおいを利用したという話がある。助手に雇ったホボにこの話をしたら，「木のてっぺんにいるホエザルの体臭なんか，どうやってかぐんだ」といい，「しかしやつのふんのにおいは，ニンニクに似たような感じもする。自分はそのにおいを容易にかぎ分けられる」といった。

事実，ホエザルに出合っても木の下でやつらの体臭をかぐことはできなかったし，ホボはわたしといっしょに森のなかを歩いているとき，「ホエザルのにおいがする」といってあたりを捜しまわって，そのふんを見つけたことが再三あった。わたしはそのたびに鼻を近づけてみたが，人糞のにおいに近い，サルのふんのにおい以外の特別のにおいをそこからかぎとることはできなかった。あるいは，アマゾンの森ではなかなか見つけることのできないサルのふんのにおいをホエザルで代表させているのかもしれない。

植物では，マタパロというイチジクの木の実がたくさん果実をつけたとき，落ちた果実が発酵して放つ，甘ずっぱい芳香をその木の周囲一帯でかぐことができた。その他に，たいていの木の実は落ちてかすかな芳香を放ち，それによってサルがよく利用する採食樹を突きとめたこともあった。ただ例外もあり，つり鐘状をした，こぶし大のニャグワスコの果実は人糞に近い異臭を放っていた。この果実はペッカリーの好物であった。

落ちた果実のにおいのほかに，木の幹からでるその樹種に特有なにおいや，花のかおりも感じられることがたびたびあったが，植物の同定があまりできていなかったうえに，それらのかおりはいずれも微妙で，わたしはそれを区別してかぎ分けるところまではとうていいかなかった。

≪タイラに出合う≫

このように森のなかにはあちこちにいろいろなにおいが漂っているものだが，それらをかぎ分けられるようになると，たとえ姿が見えなくとも，においだけで，その動物が近くにいそうなことや，また，最近その動物が通った跡だということを察知できるようになった。タイラのにおいがそうであった。

12月14日，わたしはアカハナグマの10頭余りの群れに出合ったあと，一度高い木のてっぺんに登って，上から調査地域の森林を見おろしてみたいものだと思って，ホボといっしょに登るに手ごろな大木はないかと，あちこち捜しまわっていたとき，目の前7，8メートルの所を2頭の動物が小走りに駆けぬけていった。

「あいつはなんだ？」

「ソロという動物だ」

ホボはやつらのあとを追いかけた。わたしもかれのあとに続いて走った。

そうしたら，うち1頭は，その先の低い木にとびついてよじ登った。その格好はちょっとシャクトリムシの動きに似ていたが，なかなか早かった。ホボはマチェテでその木の幹をたたいた。やつはその木の枝伝いに隣の木に移り，わたしたちが地上から追うよりも早く，4本めの木から下へとびおりて逃げていってしまった。その間，「フォッ，フォッ，フォッ」という尻上りの声と，「チィーッ・チィーッ・チィーッ」という金属的な響きをもった声と，ふた通りの鳴き声が聞かれた。

わたしには全体が黒っぽい色をした，足が短く尾が長い，吻の突きでたマングースに似た動物，とだけしかわからなかったが，ホボに聞いたら，

「のどのところはきれいなオレンジ色をしている」

「顔はやや白っぽい」

「吻はアカハナグマより長く，イヌに近い」と，そのいくつかの特徴を教えてくれた。

またかれは，ソロはふつう2頭で生活しており，日中に行動する。食べ物は，果実や小鳥やその卵が主で，ときには小さいけものを襲って食べることもあり，畑のバナナを食い荒しにくることもしばしばあるといった。現地の人たちの間で，ソロは肉は臭くてまずく，食べられるしろものではないし，毛皮は価値がないし，畑は荒らされるしでやっかいもの扱いにされているようだった。

タイラ（*Galera barbara*）は食肉目イタチ科に属する動物で，イタチやミンクに近い種類である。現地ではソロ，あるいはソロ・ウラーニョと呼ばれているが，ソロとはキツネ，あるいはずるがしこい人を意味し，ウラーニョとは〝臆病な〟という意味の形容詞である。

≪においが教えてくれる≫

わたしが3度めにタイラに出合ったのは12月28日だった。わたしは日本へ持ち帰る標本として，1頭を射ちおとすことをホボに頼んでいた。ちょうど，低い木の中ほどまで登ってこちらを振りむいた2頭のうちの1頭をねらってホボは引き金を引いた。即死であった。

やつの尾をつかんで観察路までぶら下げてきて，わたしはその場で諸特徴をノートに書きとめはじめたが，やつからも，尾をつかんだわたしの右手からも，強烈なけもの特有のにおいが発散していた。それは日本のアナグマのにおいそっくりで，一度かいだら決して忘れることのできないにおいだった。

わたしはそれからなおしばらく，毎日，調査地域内の森林を歩きまわったが，このにおいを覚えてから，少なくとも1日に1回は，森のなかで，かすかに漂うタイラのにおいをかぎ分けることができた。それはタイラが今しがたにそこを通っていった証拠であった。そして，直接出合える機会はそれほど多くはなかったが，タイラがかなりたくさん，この地域に生息していることを知ることができた。■


タイラは木の枝から枝へ
身軽にとび移って逃げていった



セイタカシギ科の鳥のすべて	
セイタカシギ	*Himantopus himantopus*
ムネアカセイタカシギ	*Cladorhynchus leucocephalus*
ソリハシセイタカシギ	*Recurvirostra avosetta*
アメリカソリハシセイタカシギ	*Recurvirostra americana*
アンデスソリハシセイタカシギ	*Recurvirostra andina*
アカガシラソリハシセイタカシギ	*Recurvirostra novaehollandiae*
トキハシゲリ	*Ibidorhyncha struthersii*



セイタカシギ科の繁殖分布。
4属7種からなり，ヨーロッパの一部
サハラ砂漠以南のアフリカ，アジア中・南部
オーストラリア，ニュージーランド
アメリカ大陸の一部，西インド諸島で繁殖する。

セイタカシギ科

Recurvirostridae

チドリ目セイタカシギ科の鳥は，数多い鳥類のうちで，もっとも清美なもののひとつである。その美しさは見る人の心にさまざまの思いを呼び起こすのだが，まずは，その外形的特徴を客観的に記しておこう。

- 全長30〜50センチ。
- からだは全体にほっそりしている。
- 頭は小さくて，くびは長く，くちばしは非常に長く細い。
- あしはとても長い。後趾（こうし）は退化して，ないか，あっても非常に小さい。前趾のあいだには，程度の差はあるがみずかきがついている。
- 羽色は一般に黒と白の単純な模様である。

この科には左の表のとおり4属7種が含まれ，カナダ南部からアルゼンチン北部にいたるアメリカ大陸，ヨーロッパ，アジア，アフリカの一部，オーストラリア，ニュージーランドに分布する。集団性が強く，コロニーで繁殖し，巣はふつう湿地や水辺につくる。

セイタカシギ。セイタカシギ科セイタカシギ属。
今にも折れてしまいそうなピンク色のあし
白と黒とを使いわけた清純な装い。
蒲柳の乙女を思わせるなよやかな姿だが
後頭が黒いのは雄の証拠だ。（上）

撮影　高野伸二







セイタカシギ

Himantopus himantopus

セイタカシギ（セイタカシギ属）は，全長38センチ前後，体重140～180グラムだが，あしは22センチぐらいもあり，飛んでいるときは尾からずっとはみ出す。フラミンゴを除けば，からだと比較してあしのもっとも長い鳥だろう。羽色は，背とつばさが光沢のある青黒色で，のどから腹まではまっ白である（ただし，ニュージーランドには全身黒色の亜種がいる）。繁殖期の雄は後頭から後頸（こうけい）にかけて，個体によって程度の差はあれ黒くなるが，雌と冬羽の雄ではここも白い。くちばしは黒くて，細長く，まっすぐである。あしはバラ色で，虹彩は赤い。

この清楚な鳥は，ヨーロッパ南部，中央ヨーロッパの一部，アフリカの大部分（マダガスカル島を含む），中央アジア，モンゴルや中

セイタカシギが湿地に巣をつくるときは
木の根や枯れ葉を積みあげて卵を水から守る。
ただし，地面がかわいていれば
砂の上や丈の低い草木のなかにある浅いくぼみが
そのまま巣に使われる。（左下）

PH. J. C. CHANTELAT



国の北部，インドからインドシナ半島，オーストラリア，ニュージーランド，アメリカ合衆国南部からアルゼンチンにいたるアメリカ大陸で繁殖する。渡りをするものもあるが，北のほうで繁殖するものを除けば，あまり遠くまで移動しない。熱帯地方と南半球では一般に留鳥である。しかし，水辺の鳥だから，乾期になって水たまりが干上がると移動しなければならず，いつも同じ場所にいるとはかぎらない。日本では中国方面で繁殖する鳥がときどき飛来するにすぎない。

水辺の鳥にはちがいないが，ふつう塩水のところは避け，干潟や岩礁の上にいることはめったにない。水の浅い湿地や湖岸，水たまりの多い草原にすみ，水浸しになった畑や入り江の岸なども好むようだ。それも小さなくさむらがあちこちに散在する開けた場所に多く，ヨシのような丈の高い植物のびっしりはえたところは避ける。

このような場所の浅瀬で，セイタカシギは1日じゅう軽やかに歩きまわり，ときには泳いだりしながら，くちばしでどろをかきまぜて食物を捜す。えさは他のシギ類と同じく昆虫（こんちゅう）とその幼虫，カタツムリ，ミミズ，ゴカイなどで，小さなカニや魚も食べる。また，ごく少量だが植物の種子も食べる。近くに他のシギ・チドリ類がいる場合は，長いあしをいかして，かれらがはいれないような深みで，ゆうゆうとえさをあさる。

仲間づきあいはよく，たいてい5～20羽の群れで暮らしている。繁殖期でさえ，ひとつがいでいることはめったになく，一種のコロニーをつくってひなを育てる。

自警団的共同威嚇飛行

静かな沼沢地にこの鳥の鋭い「キッ，キッ，キッ」という鳴き声が響きわたるようになれば繁殖期がきた証拠である。その時期は場所によって異なるが，北半球ではだいたい4～6月だ。巣はふつう水辺のくさむらにあり，地面のくぼみにわずかの草や枯れ枝を敷くだけである。しかし，ときには浅い水たまりのなかにつくることもあり，この場合には，水草や根，枯れ枝を積みあげた，粗雑だがかなり大型のものになる。1腹の卵数は4個。卵は土色の地に黒い斑点がある。抱卵（ほうらん）は雌雄交替で約25日間行なう。ひなは薄茶色に黒い縞や斑があり，孵化後すぐ巣立ちして，くさむらに身を隠す。独立するまで約1か月かかり，その間，親鳥に養われる。敵が近づくと，コロニーの親たちはいっせいに飛びたち，激しく鳴きながら敵の周囲を旋回して威嚇する。

繁殖期以外は静かな鳥で，飛びたつときや，飛んでいるときにちょっと鳴くぐらいのものだ。飛ぶときは長いあしをまっすぐ後ろにのばすので，非常に独特のシルエットができる。かなり速く羽ばたいて舞いあがり，ある高さまで達するとゆっくり飛行する。おりる前には1，2度輪を描いてから軽くおり立つ。

長い長いあしをまっすぐのばし
コウノトリのようなシルエットを描いて
セイタカシギが飛ぶ。
繁殖期以外に鳴くのはこんなときだけで
鋭くも，もの悲しい声を空に響かせる。（上左）
PH. C. MARDIN–JACANA

セイタカシギは
丈の高い植物がおい茂っているような場所は避け
小さなくさむらの散在する開けたところを好む。
あまりにもあしが長く細いためか
歩き方はいくぶん不安定である。（上）
PH. BEL–VIENNE–JACANA



ソリハシセイタカシギ

Recurvirosra avosetta

ソリハシセイタカシギ（ソリハシセイタカシギ属）は，そりあがった長い長いくちばしをもつ清楚な鳥だ。羽色は，頭上から後頸にかけてと肩の部分，つばさの先半分ほどが黒く，残りの部分は白くて，すっきりした配色になっている。つばさを閉じた姿を横から見ると，白いからだに２本の太い横縞がはいっているように見える。からだはセイタカシギより大きく，全長約44センチ，体重350グラム前後である。あしは灰青色で，セイタカシギよりやや短い。

繁殖地域はヨーロッパから中国東北部にいたるユーラシア大陸の温帯地方で，とりわけ中央アジアやモンゴルなどのステップ地帯に多い。ヨーロッパでの繁殖地はきわめて局所的で，北海やバルト海の沿岸，ハンガリーの湖沼地方，スペインやポルトガル，地中海沿岸に点々とちらばっている。このほか，北アフリカ，東アフリカの湖沼地帯（キブ湖など），南アフリカなどのところどころで繁殖するものもある。だいたい渡り鳥で，冬はアフリカやアジア南部で過ごす。東アフリカの湖で越冬するものは数が多く，大きな群れがいくつもできる。日本では従来記録がなかったが，1971年２月，木曽川河口の鍋田干拓地ではじめて観察され，つづいて72年４月には渥美半島の田原町にも姿を現わし，今後の渡来が期待されている。

ソリハシセイタカシギのすみかは湖の岸，入り江，河口の湿地や泥地で，淡水だろうと海水だろうと，あるいはまた内陸の塩水だろうとかまわない。ある地方ではフラミンゴと同居して暮らしていることもある。

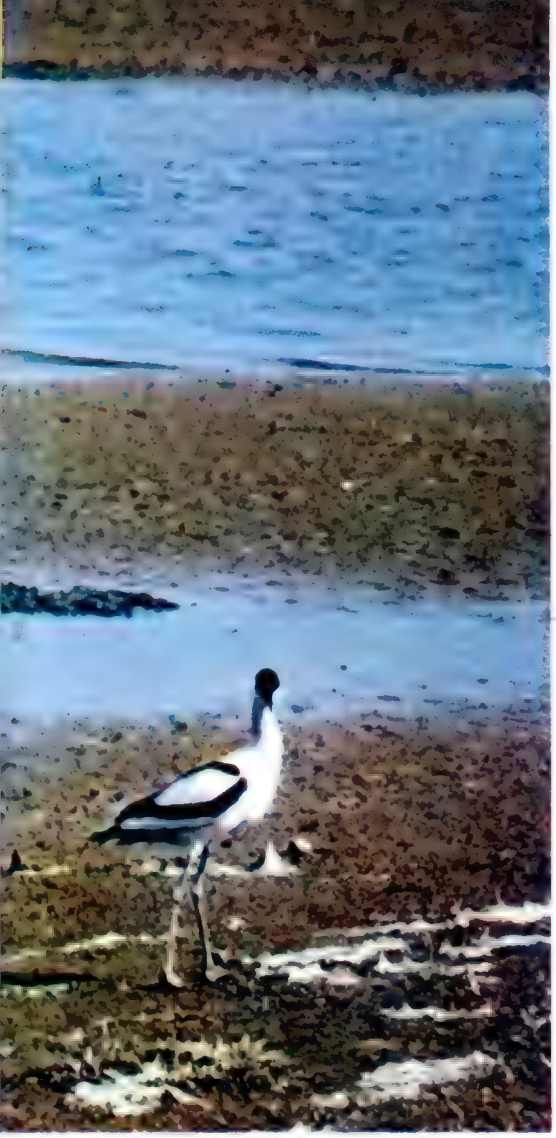
どじょうすくい的採餌法

この鳥は１日の大部分を水のなかに突ったって過ごし，ときどき水底のどろをくちばしで探っては，えさになる小動物を捜す。ところで，このくちばしは，あまりにも細くきゃしゃなので，どんなものも突き刺したり，ついばんだり，くわえたりすることができない。そのかわりかれらには沼沢地にすむ他のどんな鳥にも見られない独特のやり方がある。

かれらはまず，くちばしを水中にさし入れる。すると，そり返ったくちばしの先半分が水面と平行になり，このまま頭を左右に振れ



ソリハシセイタカシギは
抱卵の仕事を夫婦で仲よく分かちあう。
その交替にあたっては，あいさつでもするようなちょっとした儀式をとりかわす。
セイタカシギ科ソリハシセイタカシギ属。（左）
PH. E. HOSKING



ば、水がかきまぜられて、どろや水のなかの小動物が口にはいってくる。くちばしの内側には小さな突起があるので、はいってきたえさはこの突起にひっかけられるのである。水が深いときは頭も水中に突っこみ、ときにはカモのように泳ぎながら頭を入れ尻をあげて、さか立ちのような格好でえさをすくうこともある。このように、ソリハシセイタカシギは長いくちばしをゆすぶりながら、次々と水たまりの小動物を平らげていくわけだが、同じ場所で1時間以上、飽きもせずにあさっていることも珍しくない。

繁殖は年1回で、水辺に近い泥地や砂地に小さなコロニーをつくって行なわれる。それぞれの巣はたがいに近くにあり、60センチしか離れていないこともあるほどだ。この巣はふつう地面のくぼみにかわいた茎や細い木の根を集めただけの簡単なもので、砂地では何も敷かないことが多い。

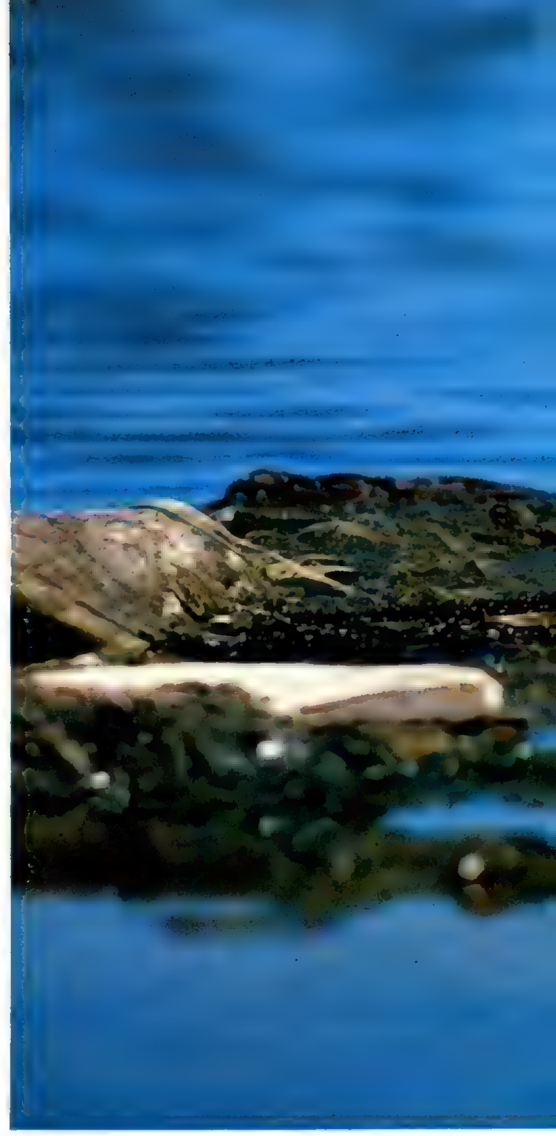
1腹の卵数は3、4個。ベージュ色の地に黒い斑点のついた卵である。雌雄交替で約24日間抱卵するが、このころになると、ふだんとはうって変わって大胆になり、人が近づいてもなかなか逃げようとせず、相手を威嚇したり、擬傷をしたりして、卵やひなから敵を遠ざける。生まれたひなは、他のシギ類と同様にすぐ巣立ちし、歩きながらえさをもらう。孵化後約6週間で完全に独立する。

水辺に遊ぶソリハシセイタカシギの家族。
この写真でもわかるとおり
雌雄に外見的な違いはほとんどない。
ただ、雄のほうは虹彩の赤みがやや濃い（上）
PH. DOBRSKI ［illegible］



ソリハシセイタカシギのそり返ったくちばしは
とても細くきゃしゃなので
獲物をつまんだりすることはできない。
水をかきまぜ、水中に浮遊する小動物を
くちばしの突起にひっかけてのみこむのだ。
PH. G. HAKANSSON BRUCE COLEMAN LTD.





ヒレアシシギ科

Phalaropodidae

動物を分類するにあたっては、外形ばかりでなく骨格その他の内部形態も考慮されるわけだが、チドリ目ヒレアシシギ科について、ここでは外形的特徴を列挙しておこう。

- 全長20～25センチ。
- 雌雄の羽色は多少異なり、しかもふつうの場合と逆に雌のほうが雄より大きく、色どりも美しい。
- 羽毛（うもう）は柔らかく、非常に密生している。
- 跗蹠（ふしょ）は扁平で、ゆびのあいだには葉状のみずかき（弁膜）がついている。

この科の鳥は形態が特殊であるばかりでなく、それに見合ったさまざまの生態的特徴をそなえている。そのひとつは、タマシギの場合と同様に、雌雄の役割が多くの鳥類と逆になっていることだ。つまり、雌がテリトリー（なわ張り）の防衛やディスプレーを行ない、雄は産卵以外の雌の仕事（抱卵、育雛など）を引き受けるのである。

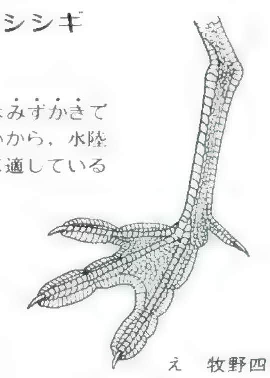
また、1年の半分以上を海の上で暮らす点も他のチドリ目の鳥には見られない特徴である。繁殖期間中に北極周辺の地上で生活する時間と、渡りや越冬期間中に海上で過ごす時間とをくらべれば、この科の鳥は海鳥の仲間に入れたほうがいいくらいだ。柔らかくて防水性に富み密生した羽毛（とくに腹側）のおかげで、羽毛のあいだにたくさんの空気が含まれ、からだは楽々と水面に浮かぶ。また、あしにみずかきがあるので泳ぎもうまい。つまり海上生活にふさわしいからだつきをしているのだ。えさも海のプランクトンを好み、プランクトンの豊富な洋上を越冬地に選ぶ。

繁殖地はユーラシアとアメリカの極北地域にあり、だいたい北極圏内だが、ところによりもう少し南でも繁殖する。

この科には、これから述べるヒレアシシギ属3種だけしかいない。

ヒレアシシギのあし

完全なみずかきではないから、水陸ともに適している



え　牧野四子吉

アカエリヒレアシシギ

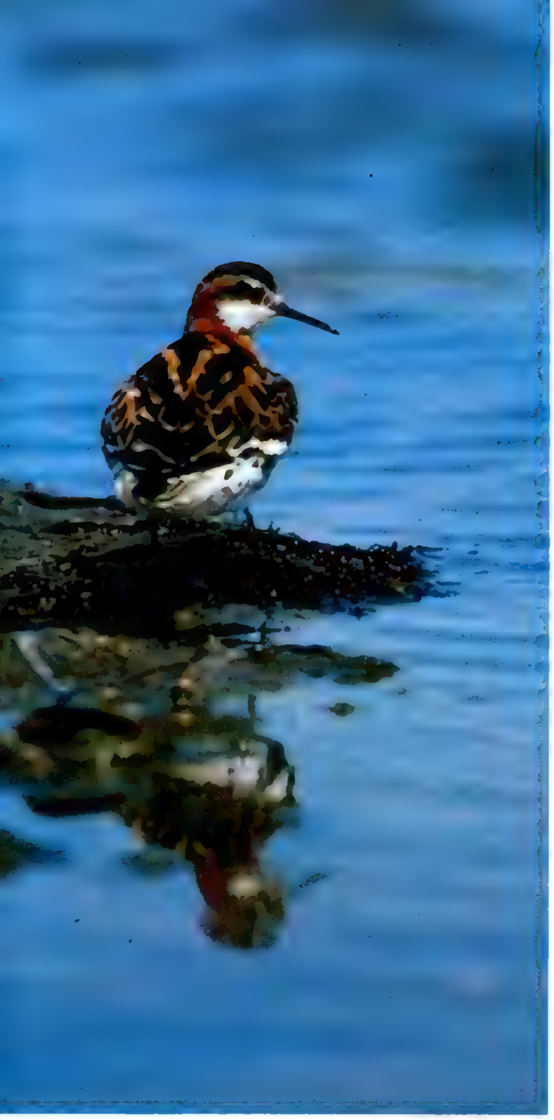
Phalaropus lobatus

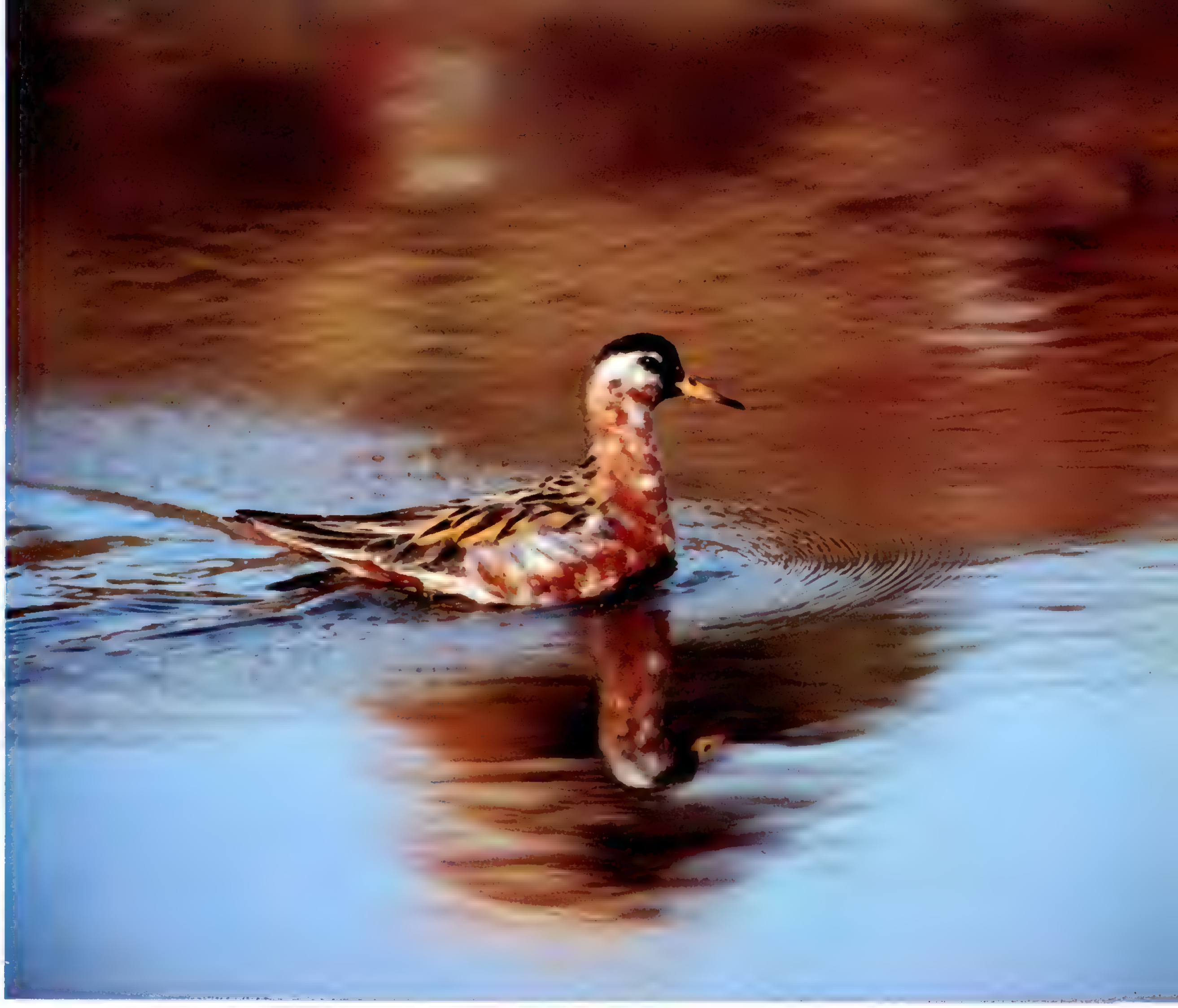
アカエリヒレアシシギとは〝赤いえりを持ち、あしにひれのあるシギ〟の意である。なるほど、あしにひれ（弁膜）があるが、えり（のどから胸）が赤いのは繁殖期だけのことだ。つまり、夏羽では、からだの上部が赤褐色の縞と白い斑点のついた黒色で、わき腹は灰色、腹部は白く、頸から上胸にかけて赤褐色になるのである。ただし、雌のほうが全体にずっと鮮明な色合いで、えりの赤褐色もくっきりとしている。雌雄とも冬羽は背中が白い羽毛の混じった灰褐色で、腹部は白く、目の後ろが黒い。

この鳥の繁殖地は新旧両大陸の北極圏とその近辺で、ヨーロッパではスカンジナビア半島とアイスランドにかぎられる。アジアでも北極海とベーリング海に面したシベリア北部で営巣（えいそう）するだけである。繁殖が終わるとアラビア海、アフリカの沿岸、インド洋、ニューギニアやペルーの沖合いなどの洋上で越冬し、アラビア海では数千羽の群れの姿も観察されている。日本ではかなりふつうに見られる旅鳥で、海岸近くの水たまりなどで小群を成していることがある。ときには内陸に迷いこむこともあり、野球のナイター

アカエリヒレアシシギ（冬羽）
ヒレアシシギ科ヒレアシシギ属
冬の間はたいてい南の洋上にすみ
水面をのんびりたゆたいながら
プランクトンなどを食べて暮らしている
撮影　[illegible]

アカエリヒレアシシギは
繁殖期が近づくと、がらりと装いを改め
左の冬羽のものとは別種のような姿になる。
その名のとおりえりの部分が赤褐色になるのも
このころの話だ。（上中）
撮影　柳澤紀夫





の照明に引き寄せられてくることも多い。しかし大部分は海上生活をしながら通過するので、見かけける機会はあまり頻繁にない。

波にぷかぷか不沈鳥

この鳥は繁殖期以外はほとんど海上で過ごす。凍りつくような浮氷群のあいだでも、岩礁に砕けちる波の上でもまったく平気で、海面に漂う藻類の上にとまって藻をつつき、えさを捜していることも多い。柔らかくて密生した羽毛をもっているおかげで、何時間でも木片のように労せず海水に浮遊していることができるし、泳ぎもうまい。跗蹠は平たくて櫂のようだし、ゆびには独特の葉状のみずかきがついているので、このあしでこぎ、頭をクイナのように動かしながら、速く軽快に進んでいくのだ。その姿は「水上をすべるように」という形容がぴったりする。ただ、この鳥は水にもぐることはできない。というのも、あまり羽毛が密生しているため、からだの大きさにくらべて体重が軽すぎ、しかも、羽毛のあいだに無数の気泡がたまっているので、浮力が大きすぎるからだ。

このように水上生活に適応したアカエリヒレアシシギだが、あしゆびのみずかきはカモメなどのように完全なものではないため、地上での動作もかなり敏捷で、かたい地面を小股で軽快に歩き、危険があれば草木のあいだにうまくまぎれこむ。空中ではくびをすぼめて速く飛ぶ。そのため、飛んでいる姿は実際よりずっと小さく見える。

性質は穏やかで、人をまったく恐れない。おどかしたりしなければ、ごく近くまで近づいてゆっくり観察することができる。といっても、ちょっとでも追いかけたりすれば、とたんに用心深くなってしまう。

えさは昆虫類や軟体動物、甲殻類など小さな無脊椎（むせきつい）動物で、水の上や浜べ、ときには飛びながら空中で見つけて食べる。この鳥が大きなクジラの背中にとまっているのを見かけることもあるが、これはクジラに寄生している小さな動物を捕えるためのようだ。

雌雄の役割が逆転

繁殖期になると、まずはじめに雌が営巣地にやってくる。ふつうの鳥ならつがいでくるか雄が先に到着するが、ヒレアシシギ類の場合は逆なのだ。そしてこれだけでなく、その後も、卵を産むことを除いた繁殖のさまざまの局面で、他の多くの鳥では雌が行なう役割を雄が引き受ける。たとえば巣づくり、抱卵、育雛などがそれだ。逆に雌は、ディスプレーやテリトリーの防衛など、ふつうの鳥では雄が行なう仕事を引き受ける。ヒレアシシギは小さなコロニーをつくって繁殖するが、それぞれの巣のまわりは小さなテリトリーとなっており、どの雌も自分のそれを必死に防衛する。雌は1羽の雄だけに求愛するようだが、この点については異論があり、一妻多夫だという研究者もいる。

巣はふつう海岸近くの池や湖のふちにある草のおい茂った場所や河口の中州のくさむらなどにつくられる。これは草木のあいだにある浅い地面のくぼみを利用したもので、雌はここに比較的小さな卵を4個産み落とす。卵はごく薄い緑色の地に黒っぽい斑点がまだらについている。雌はまったく抱卵せず、卵を産むとその世話を雄にまかせてしまう。

雄の抱卵中に敵が近づいてくると、雌はかなり大きな輪を描きながら不安げにあちこち

ハイイロヒレアシシギ（夏羽）。
ヒレアシシギ科ヒレアシシギ属。
アカエリヒレアシシギよりひとまわり大きく
全長約20センチ，体重50グラム程度で
くちばしも比較的平たく短い。（上右）
撮影 [illegible]



冬羽のハイイロヒレアシシギは
その名のとおり，全体に灰色っぽい。
他のヒレアシシギと同じく
密生した柔らかい羽毛のおかげで
楽々と水に浮かんでいることができる。（右）
撮影 [illegible]



飛びまわりはじめる。しかし，擬傷をして相手の目を欺くことはないらしい。卵は18日ぐらいで孵化する。ひなを育てるのももっぱら雄のほうだが，雌もときにはひなにえさを運ぶことがある。ひなは黄褐色に黒い模様のあるうぶ毛でおおわれており，周囲の色にまぎれて見分けにくい。

ハイイロヒレアシシギ *P. fulicarius* は，アカエリヒレアシシギよりひとまわり大きく全長約20センチ，体重50グラム程度で，くちばしは平たく，比較的短い。雌の夏羽は，背面が黒く淡黄褐色の斑があり，顔は白く，下面は全体に濃い赤褐色である。雄も雌に似ているが，色合いは雌ほどあざやかではない。冬羽は雌雄とも背中が灰色で，頭上と腹部は白く，後頸には黒斑がある。習性と繁殖地はアカエリヒレアシシギとほぼ同じだが，繁殖区域はほとんど北極圏内にかぎられ，また，アカエリヒレアシシギより外洋性が強く，渡りのときに海岸で観察する機会も少ない。このため日本では，近海を渡るものは多いと推測されるにもかかわらず，ほとんど見ることのない鳥のひとつとなっている。

アメリカヒレアシシギ *P. tricolor* は3種あるヒレアシシギの残りの1種だが，他の2種と違ってアメリカ大陸だけに分布し，また，海洋より内陸の淡水を好むようだ。おもにカナダ西部とアメリカ合衆国西北部の湖沼で繁殖し，冬は南アメリカで越冬する。全長約23センチ，雌の夏羽は，背が灰色で腹が白く，くびから肩にかけてくっきりしたくり色の帯が2本ある。

ヒバリチドリ科
Thinocoridae

ヒバリチドリ科に分類される鳥は全長17～20センチぐらいで，くちばしがウズラのそれのように短く小さな円錐形をしており，その食性もほとんど植物質である。ヒバリチドリの名にもかかわらず，外観はむしろサケイかウズラを思わせる。鼻孔は膜によっておおわれているが，これは風に巻きあげられる砂が鼻孔にはいるのを防ぐためらしい。というのも，この鳥のすみかは木のはえていない高山や海岸（氷河やアンデスの急斜面が落ちこんだようなチリ沿岸）の荒地だからだ。つばさは長く先がとがっている。ずんぐりしたからだつきで，尾は短く丸い。あしは短いが，もっぱら地上で暮らし，短距離しか飛ばない。

2属4種からなり，すべてエクアドル以南の南アメリカに分布している。海岸にいる種と高山にすむ種があるが，いずれも小石だらけの不毛の地に小さな群れをなして暮らしている。

巣は地面のくぼみを利用し，1腹の卵数は4個。卵は粘土色の地に褐色と紅紫色の斑点がついている。**コヒバリチドリ** *Thinocorus rumicivorus* では，えさを捜すために巣を離れる場合，卵にかわいた砂をかぶせる。その抱卵期間は不明だが，ひなは孵化するとすぐ巣立ちする。その後親鳥がひなをどう育てるかは，まだよくわかっていない。

カニチドリ科　*Dromadidae*
カニチドリ　*Dromas ardeola*

カニチドリ（カニチドリ属）は次に出てくるイシチドリ類と類縁が近いが，繁殖習性がきわめて特殊であるため，1種だけでカニチドリ科を形成している。全長は約38センチで，アジサシを思わせるような強力で鋭いくちばしをもっている。羽色は背とつばさだけが黒く，残りの部分は純白である。あしは灰青色で，シギ類のように長い。4本のゆびのうち前趾3本のあいだには部分的にみずかきがある。この鳥はもっぱら海岸地帯にすみ，ペルシャ湾からアンダマン諸島，東・南アフリカの沿岸，マダガスカルで繁殖する。冬の分布域はもう少しひろがり，インド洋の北側と西側の各地の海岸で越冬する。

この鳥は群れる性質が強く，よく鳴く鳥で，しばしば数百羽の群れをつくり，しわがれた声で騒々しく鳴きたてている。また，警戒心が非常に弱く，人が近づいてもほとんど恐れない。食物は海岸にすむ甲殻類や軟体動物が中心だが，とりわけカニが好物で，持ちまえのがんじょうなくちばしで殻を打ち砕いて食べる。また，大きい獲物は地面に打ちつけて砕いたり，引き裂いたりする。

トンネルの巣と白い卵の関係

繁殖期は場所によって異なり，ペルシャ湾沿岸では5月，セイロンでは6月となっている。カニチドリはこの時期になると海岸から川岸や砂州に移動して巣をつくるが，この巣は非常に変わっている。つまり，砂地にトンネルを掘ったものなのだ。しかもコロニーで繁殖するから，繁殖地の地面には多数の穴があいている。また，この巣穴は直径20センチ，奥行き1.5メートルもあり，いったん下に下がってからカーブし，奥のほうは上向きになっている。産室はいちばん奥にあり，草や枝は敷かない。1腹の卵数は1個だけで，卵はかなり大きく，まっ白で斑点がない。ふつうシギ・チドリ類の卵は淡黄褐色の地にさまざまの斑点がある。これは地面の色にまぎれて敵の目をのがれるためだが，カニチドリの場合には地中の穴に営巣するのでその必要がない。だから樹洞に営巣するフクロウなどと同じく，まっ白でいいわけだ。ひなは灰色のうぶ毛でおおわれ，他のチドリ類と同じく生まれるとすぐ歩けるようになるが，しばらくは安全な巣にいて親鳥に養われるらしい。

コヒバリチドリ。ヒバリチドリ科ヒバリチドリ属。
南アメリカの小石だらけの荒れ地にすんでいる。
あしが短いくせに，もっぱら地上で過ごし
短距離しか飛ばない。
チドリ目としては珍しく菜食主義者だ。（上）
PH. E. FRIZE

ソリハシセイタカシギは
塩水湖や海岸の干潟，入り江などを好む。
というのも，この鳥は
海水中の小動物を主食としているからだ。
とはいえ，淡水にもいることはいる。（右）
PH. E. HOSKING

抱卵するツバメチドリ。
ツバメチドリ科ツバメチドリ属。
巣はふつう地面の浅いくぼみをそのまま利用し
雌雄交替で18日間ぐらい抱卵する。
両親はあらゆる手段で子を守る。（**104—10，11**）
PH. S. C. PORTER-BRUCE COLEMAN LTD











イシチドリ科　*Burhinidae*

この科の鳥は，形態，生態ともにチドリ目としてはいっぷう変わった特徴をもっている。その外形的特徴を簡単に列挙しておこう。

- 全長35～52センチ。
- 頭部は大きく，目も非常に大きい。
- あしは長く，脛骨（けいこつ）と跗蹠骨（ふしょこつ）のあいだの関節部がふくらんでいる。ゆびは前趾の3本だけで，そのあいだにはみずかきの痕跡がある。
- 雌雄に外形的な違いはない

この科には3属9種が含まれ，ヨーロッパの中・南部，アフリカのほぼ全域，アジアの南・西部，ニューギニア，オーストラリア，中央アメリカ，イスパニョーラ島（ハイチ），南アメリカ北部に分布している。

チドリ目にしては珍しく，ほとんどの種が不毛の半砂漠地帯にすんでいる。昼間活動するものもあるが，大きな目をしていることからもわかるようにむしろ夜行性で，ふつう昼は茂みややぶのなかでおとなしくしており，日暮れとともに騒々しく鳴きはじめる。

なお，イシチドリ類はからだつきが他のチドリ類と似ているためチドリ目に分類されるが，頭骨の形態その他2，3の解剖学的特徴はツル目に近いため，この科をツル目に入れる学者も少なくない。

イシチドリ　*Burhinus oedicnemus*

イシチドリ（イシチドリ属）は全長約40センチ，体重400グラム前後で，淡黄褐色の地に黒褐色の斑や縞がある。腹部は斑が少ないので白っぽく見える。あしは長く黄色で，節くれだっている。くちばしも基部は黄色く，先半分は黒い。目は非常に大きくて，奇妙な顔つきをしている。虹彩はこはく色だ。

繁殖区域はヨーロッパ中・南部から中央アジアおよびビルマまでの地域と北アフリカ，アラビア半島である。ヨーロッパのものの一部は冬になると北アフリカなどに渡るが，他の地方では留鳥（りゅうちょう）となっている。すみかは荒地や石の多い平地，河原，半砂漠地帯で，とりわけ茂みが散在しているところに多い。

イシチドリは孤独を好む鳥で，秋に小さな群れをつくるほかは，単独かつがいで暮らしている。また，非常に用心深く，どんなにおとなしい動物に対しても慎重に構えている。何かを見つけるとすぐ茂みのなかに駆けこみ，それを突きぬけて反対の端から逃げていく。また，火急の危険を感じ，しかも近くに茂みのない場合には，地面にじっとうずくまってしまう。すると，土色の羽毛（うもう）が地面にまぎれ，ほとんど見分けがつかなくなるのだ。

イシチドリはどちらかといえば夜行性である。昼間は大きなひとみをすっかり縮め，じゃまされないかぎりじっとしている。ときどき歩くことはあってもよちよちとぎこちない。ただし，必要な場合には非常に速く走ることができるし，飛び方も軽やかでかなり速い。しかし，高いところは飛ばず，たいていはすぐに降りる。

ジキルとハイドのように

ところが日暮れになると，昼間とはうって変わって活発になる。あちこち駆けずりまわり，いくぶん悲しげな声で鳴き騒ぎ，かなり



ワニチドリ。ツバメチドリ科ワニチドリ属。
古代ファラオの建物にもよく描かれている
由緒正しい鳥で，象形文字としても使われ
アルファベットのじを表わす。その理由は
この鳥の胸を見ればわかるだろう。（左）
PH. S. C. PORTER BRUCE COLEMAN LTD

イシチドリ類はどちらかといえば夜行性で
目もフクロウのようにキョロリとしている。
写真はケイプイシチドリ *Burhinus capensis* で
南アフリカの半砂漠地域にすんでいる。
イシチドリ科イシチドリ属。（上）
PH. P. JOHNSON N. H. P. A

イシチドリの繁殖分布。
イシチドリ科イシチドリ属のこの鳥は
ヨーロッパ中・南部から中央アジア，ビルマまでと
北アフリカ，アラビア半島で繁殖する。
大部分は留鳥である。





の高さまで舞いあがって，昼間の姿からは想像できないほど巧妙に飛びまわる。とくに月夜などひと晩じゅう忙しく動きまわり，そのかん高い鳴き声が夜の静けさを破ってこだまする。この昼から夜への豹変ぶりは，ジキルとハイドの物語やオオカミ男の話を思わせるほどだ。

えさはミミズや昆虫(こんちゅう)，カタツムリなどが中心だが，ときにはカエルやトカゲも食べ，キジやシャコなど地上に営巣（えいそう）する鳥の卵やひなを盗むこともある。さらに注目に値するのはこの鳥が野ネズミを食べることで，その量はかなりにのぼるらしい。これは，ネコのように待ち伏せ，駆けだして捕えて，こなごなに砕いてからのみこむ。

春の繁殖期になると，イシチドリは毎年同じ場所にもどってくる。雄は雌の前に出ると気どったようなポーズで求愛のディスプレーを行ない，雌にえさをひと口ほど与える。その一方で，駆けたり飛びかかったり，雄どうしのテリトリー（なわ張り）争いも活発に行なわれる。

巣は雌が地面をひっかいてつくった浅いくぼみだけのものだが，小石やウサギのふんで念入りに固めたものもある。雌は5月のはじめごろ褐色の斑点のついたベージュ色の卵を2個（まれには3個）産み，雌雄交替で26日間ぐらい暖める。抱卵（ほうらん）していないほうの親鳥は必ず巣の近くで見張りをするが，この見張りの交替に際しては奇妙な儀式が行なわれる。抱卵しているほうの鳥が相手を見つけると，くちばしを地面に向け，おもむろに起きあがって折れた小枝や小石を捜して卵の上に投げかける。そして相変わらずゆっくりと遠ざかって身を隠そうとするのだ。この間に声を出すようなことは決してない。これは，つがいといってもたがいに相手を認めるまでにいたっていないので，それを識別するシグナルのような働きをしているともいわれるが，はっきりはしない。

孵化したひなはその日のうちに巣立ちし，親鳥のあとに従って動きまわる。危険な場合には，成鳥がよくやるように地面に腹ばいになって見つからないようにする。黒い縞のはいった黄褐色っぽい羽毛のおかげで，うまく地面にまぎれることができるのだ。ときには両親の一方が敵の注意をそらそうとして擬傷を演じることもある。ひなは孵化後6週間ぐらいで親から完全に独立することができる。なお，この鳥は年2回繁殖することもある。

イシチドリはとても臆病な鳥で
ちょっとしたことでもすぐ茂みに逃げこむ。
近くに茂みがなければじっとその場にうずくまり
土色のからだを地面にまぎれこませて
敵の目をくらませる。

PH. A. FATRAS

ツバメチドリ科

Glareolidae

チドリ目ツバメチドリ科には6属17種が含まれ，全長は18〜26センチで，どの鳥もくちばしが短い。また，ほとんどの種では，メンフクロウやヨタカのように中趾(ちゅうし)の内側が櫛歯状になっている。

この科はふたつのグループに分けることができる。ひとつはスナバシリの仲間の4属9種で，いずれももっぱら地上でえさを捜す。この仲間はあしが長く，羽色（うしょく）は砂色かそれに近くて，砂漠や半砂漠地帯にすんでいる。スナバシリとは“砂走り”の意で，それにふさわしく地上をよく走りまわり，追われても飛ぶよりは走って茂みにもぐりこむことが多い。ほとんどの走鳥類と同じく後趾がなく，ゆびは前趾の3本だけである。

もう一方はツバメチドリ類2属8種で，大部分のえさはツバメのように飛びながら捕える。あしは短く，つばさは長くて先がとがっており，おもに草原やステップで繁殖する。スナバシリ類と異なり，後趾もちゃんとある。

ワニチドリはゆびが3本しかないあしで
地上を軽やかに，しかも速く駆けまわる。
また，ナイル川の川岸では
ワニの背中を静かに歩きまわっている姿が
よく見かけられるという。

PH. J. P. VARIN-JACANA



スナバシリ　*Cursorius cursor*

スナバシリ（スナバシリ属）は全長約22センチ、長いあしはクリーム色で、くちばしは短くとがっている。羽色は全体に砂色で、眉がくっきりと白く、その下が黒い。後頸（こうけい）は灰色を帯びている。初列風切羽（しょれつかざきりばね）と下雨覆（したあまおおい）は黒く、飛んでいる姿を下から見るとつばさが黒く見える。アフリカ北部の砂漠や小アジア、インド北西部の荒れはてた地にすんでいるが、ときどきヨーロッパの各地にも飛来する。

〝砂走り〟の名にふさわしく、いつも猛スピードで砂地の上を走りまわっており、ときどき立ちどまってはあたりを見まわす。飛ぶのも並みの鳥よりうまいが、めったなことでは飛ばない。驚いたときにも、地面の色とまぎれやすい羽毛の隠蔽色をたよりにじっとうずくまるだけで、よほど危険がさし迫らなければ飛ぼうとはしない。

えさはおもに地上で捜す。これは昆虫類とその幼虫が中心だが、カタツムリや小さなトカゲなども食べる。

繁殖期は場所によって異なり、3月から6月にわたる。1腹の卵数は2個で、卵はクリーム色の地にたくさんの斑点や縞があり、地面にじかに産みおとされる。雌だけが17～18日間抱卵する。

スナバシリ属には全部で3種ある。どれもよく似ており、アフリカ、インドに分布する。

ワニチドリ

Pluvianus aegyptius

ワニチドリ（ワニチドリ属）はナイルチドリともいわれ、あしが非常に短く、外観や羽色もツバメチドリ類に似ているが、地上性なのでスナバシリ類のひとつに数えられている。後趾を欠き、ゆびが3本しかない点でもこの仲間にはいる。中趾の内側に櫛歯状の突起はない。全長約21センチで、羽色は上面が灰色、下面が淡黄褐色をしており、頭上、過眼線、後頸から背、上胸の輪が黒い。

繁殖地はアフリカで、セネガルから東はエジプトやエチオピア、南はウガンダやアンゴラ北部に及んでいる。現在は少なくなってきたが、むかしはナイル川沿岸でごくふつうに見られ、古代ファラオ文明の遺跡にはよくこの鳥が描かれている。すみかはだいたい川の砂州にかぎられ、定住性が強いので洪水などがないかぎり移動することはない。

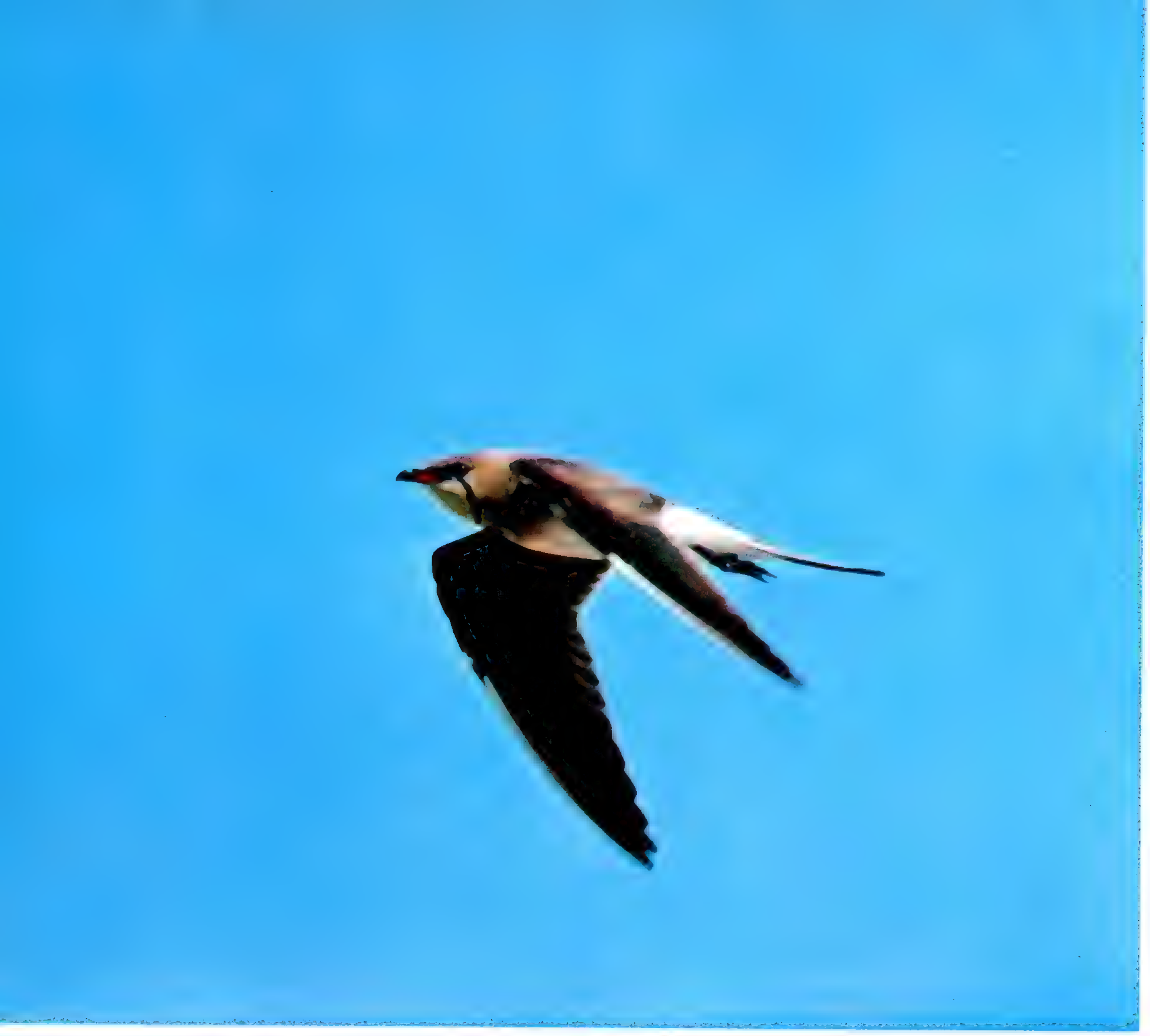
この鳥は、地上では速く敏捷に駆けまわり、また、「チィー、チィー」というよく響く声で鳴きながら飛びまわっている。

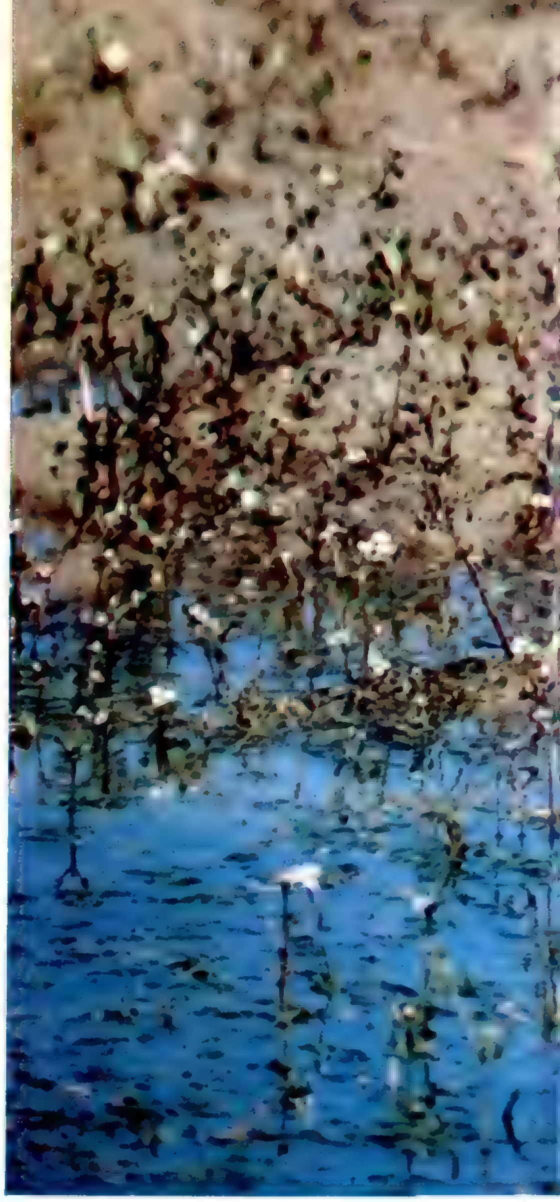
ところで、この鳥が川岸の土手でまどろむワニの背中を静かに歩きまわっていることがよくある。このためにワニチドリの名があるわけだが、それだけでなく、むかしからこの鳥については、ワニの口のなかにはいりこみ、歯のあいだの肉片や食物のかすを取り除いてやるので、ワニはそれが終わるまでじっと口をあけているという話がまことしやかに伝えられている。しかし実際にその場面を目撃した学者はなく、現在ではこの話は単なる言い伝えにすぎないと考えられている。

ワニチドリは卵に砂をかけ、そのうえで抱卵するという変わった習性をもっている。これは地中に蓄積された太陽熱を利用して孵化を助けるためともいわれるが、逆に気候の変化の激しい砂漠で日中の温度が高くなりすぎるのを防ぐためとも考えられ、はっきりはしない。ときには同じやり方で自分の子どもを砂に埋めることもあるらしい。1腹の卵数は2，3個、卵はクリーム色の地に褐色の斑点や縞がはいっている。産卵期は場所によって異なり、スーダンで1～4月、ナイジェリアで2～5月となっている。



長いあしをたたみ，地面にうずくまるスナバシリ。
ツバメチドリ科スナバシリ属。
ふだんは〝砂走り〟の名のとおり
砂漠や荒れ地を忙しそうに走りまわっているが
今は何か危険を感じとったのかもしれない。
PH. J.-F. ET M. TERRASSE





ツバメチドリ

Glareola pratincola

ツバメチドリ（ツバメチドリ属）は全長約26センチ、体重150グラム前後のなかなかスマートな鳥である。羽色は、背中と胸がオリーブ褐色で腹部は白っぽく、尾の先端と風切羽は黒い。のどはクリーム色で、その周囲に黒い縁どりがあり、全体にすっきりした印象を受ける。飛ぶとつばさの下面のくり色がよく目だつ。くちばしは短くやや扁平で太く、先端が下方に曲がっていて、色は黒い。あしも黒い。雌雄はほぼ同じ色だが、幼鳥は黒いのどの輪を欠いている。

この鳥は地中海の沿岸地方と北アフリカ、小アジアから中央アジア、モンゴルにいたるステップ地帯、中国の大部分、インド、アジア南部、アフリカの草原地帯に分布しており、ヨーロッパではカマルグ、スペイン、シシリー島、サルジニア、バルカン半島などに4月ごろ渡来して繁殖し、9月はじめごろにはまた北アフリカに渡っていく。エジプトでは留鳥もいて、渡りのときや冬には大群をなして暮らしている。日本では春秋の渡りに際してときどき河口や干潟、干拓地に渡来するが、その個体数は多くはないようだ。

この鳥は、わずかな植物がまばらにはえている広々とした平原を好み、池や沼のほとりにとどまることもよくある。めったに水を飲まないので、淡水のところでも塩水のところでも見かけられる。

ツバメチドリは、つばさが長く尾が燕尾であるなど、外形的にもツバメに似ているが、それだけではなく、えさのとり方もツバメとそっくりである。つまり、飛びながら昆虫を捕食するのだ。しかし、えさの種類はツバメよりはるかに豊富で、コオロギ、バッタ、トンボ、トビケラの仲間や鞘翅（しょうし）類なども食べる。アフリカではかれらがバッタの大群を追いかけまわすところから、“バッタドリ（Locust-birds）”と呼ばれている。獲物が大きすぎてそのままではのみこめないときは、いったん地上におりて殺し、細かく刻んでから食べる。狩りはスナバシリ類と同じく日暮れ時にいちばん活発に行なわれる。

繁殖地には干上がった沼沢地、ステップの木のはえていない牧草地、オカヒジキのはえた塩分の多い荒地など、人の住んでいない場所を選び、多くの場合コロニー（集団営巣地）で繁殖する。しかし、このコロニーは海鳥類の場合のように巣が密接しているのではなく、繁殖地内にかなりちらばっており、そのまわりはそれぞれのつがいのテリトリーとなっている。巣は地面の浅いくぼみを利用し、ふつう巣材といえるものは何も使わない。しかし、ときには草木の束や土くれでそのまわりを固めていることもある。卵は薄い褐色に灰色と黒の斑点がついていて、周囲の色にまぎれ、目だたない。1腹の卵数は2、3個で、これを雌雄交替に18日ぐらい抱卵する。ひなは孵化するとすぐ巣立ちする。発育は非常に早く、4週以内に飛ぶ術を知り、自分で生活できるようになる。

親鳥たちは自分の子どもに非常な愛着を抱いており、卵やひなを守るためにはわれを忘れてしまうことが多い。人が巣に近づくと、親鳥は巣の上にからだをぴったりとくっつけて見えないようにするが、それでもなお近づくと、やかましく鳴き騒ぎながら飛びまわり、相手にとびかかったりして威嚇する。また、他のシギ・チドリ類によく見られるような擬傷を演じて相手を欺こうとすることもある。ときにはコロニーにすむたくさんの鳥がいっせいに擬傷を行なうこともあるが、あちらでよろよろ、こちらでバタバタと鳥たちがうごめくありさまには、まるで戦場を思わせるような異様さが漂っているという。

流線型のからだをひるがえし
抜けるような青空にツバメチドリが飛ぶ。
空中生活にかけてはツバメにもひけをとらず
えさは飛びながらとることが多い。（上）
PH. TERRASSE

ツバメチドリは水をほとんど飲まないから
塩水でも淡水でもかまわず
無差別に居を構えることができる。
ふつうはわずかな植物がまばらにはえた
広々とした平原にいることが多い。（右上）
PH. M. LOIRET

空中生活を本領とするツバメチドリだが
地上を歩きまわっていることも多い。
日本でも干拓地や河口の河原などで
ごくときたま見かけることがある。
仙台市蒲生にて。（右）
撮影　山口昭雄











岩の上に遊ぶヒメサヤハシチドリの夫婦。
サヤハシチドリ科サヤハシチドリ属。
くちばしの基半部が黄色であしの黒い
ただのサヤハシチドリと違って
くちばし全体が黒く，あしはピンク色だ。（上左）
PH. F. MASSART-JACANA



セイウチの死体をついばむサヤハシチドリ。
サヤハシチドリ科サヤハシチドリ属。
雑食性の鳥で，このほかにも
藻類や甲殻類，軟体動物から動物の排出物まで
ほとんどなんでも食べてしまう。（左下）
PH. F. ERIZE

人のめったに訪れない極寒の地にすむせいか
サヤハシチドリは人を恐れず
南極観測隊の基地などにも訪れてきて
残飯をあさったりすることもある。
他の鳥の卵やひなをかすめとることも多い。（右）
PH. R. T. PETERSON-BRUCE COLEMAN LTD.



サヤハシチドリ科

Chionididae

サヤハシチドリ科は，全長約40センチ，ハトのようなからだつきをした２種の鳥からなっている。両者とも習性がよく似ており，南極とその近辺の島や海岸で繁殖する。この科の鳥の特徴は，上くちばしの基部に角質のさや状の付属物がついていて，くちばしをしっかりとおおい，鼻孔を保護している点である。サヤハシチドリの名もここからきたものだ。羽色はまっ白で，虹彩は赤い。翼角部には小さな角状突起がついている。

純白のこの鳥は，見た目にはいかにも無垢で悪意のなさそうな姿をしている。なるほど，仲間どうしでけんかをすることはあっても，他の鳥や人を傷つけたりすることはない。ところが，これがなかなかのくせ者なのだ。近くにすむ海鳥（ペンギンやオオトウゾクカモメなど）のコロニーのまわりをうろつき，ちょっとしたすきでもあると，その鳥たちのえさから卵，ひなまでなんでも盗んでしまうのである。サヤハシチドリ類は雑食性で，どんな死肉でも食べるし，子を産んだセイウチの後産も好む。また動物の排出物，藻類，甲殻類，軟体動物などもかれらのえさとなる。もともと人間のいない地域にすんでいるせいか，人が近づいても恐れず，南極観測隊の基地にやってきて残飯をあさったりすることもある。

２種のサヤハシチドリはたがいによく似ているが，くちばしの色で区別できる。よく知られているのは**サヤハシチドリ** *Chionis alba* で，全長は約40センチ，くちばしが黄色がかったピンク色である。あしは黒い。これはとくに地上性が強く，ふつうは水を避けているが，泳ぎもうまい。だから，学者によってはチドリ亜目とカモメ亜目の両方に類縁関係のある鳥だと考えている。南ジョージア，南オークニー，南シェトランドその他の南極の島島やホーン岬付近で繁殖する。2，3個の卵を産むが，ひなは１羽しか育てない。

もう１種の**ヒメサヤハシチドリ** *C. minor* はサヤハシチドリよりわずかに小型で，くちばしが黒い。南極やプリンスエドワード島，仏領マリン（マルチニック島），ケルゲレン諸島，ハード島などで繁殖する。

サヤハシチドリは，この写真のように
ふつうは地上にいることが多いが
泳ぎの腕まえもなかなかのものだ。
学者によっては
カモメ亜目に分類することもある。

PHILIP SCOTT

日本のシギ・チドリ類　3

渡りのさまざま

高野伸二

すでに述べたとおり，日本で見られるシギ・チドリ類の多くは春と秋に渡来する〝旅鳥型〟であり，少数のものが秋渡来して春まで見られる〝越冬型〟となっている。今回は，これらの鳥の渡りについて見てみたい。

渡りの型の違い

ひと口に旅鳥型といっても，それらはさらに，春より秋に渡来数の多い型（ここでは秋春型と呼ぶ），逆に春のほうが多い型（春秋型）に分けられ，また，秋にはほとんど見られない型（春型），その逆に秋しか見られない型（秋型）もある。秋春型の例としてはキアシシギ，タカブシギ，アオアシシギ，春秋型としてはオオソリハシシギ，チュウシャクシギ，キョウジョシギなどがあげられる。また，春型の典型としてツルシギがあり，キリアイ，ヘラシギなどは全体に渡来数は少ないが秋型といえよう。

ところで，今，わたしの手もとにシギ・チドリ類の渡来数に関する4つの資料がある。小林桂助氏が1950～1956年に大阪湾南港の埋立地で観察したもの（資料1），塚本洋三氏や筆者らが1955～1957年に千葉県行徳付近で調査したもの（資料2），柳澤紀夫氏らが1967年に同じ行徳付近で継続観察したもの（資料3），イギリスのケンブリッジ汚水処理場での長期観察をニスベット氏がまとめて1953年に発表したもの（資料4）の4つである。これらをもとにいくつかのグラフを書いてみると，**第1～第7表**のようになる。

第1表は，旅鳥型としてキアシシギ，越冬型としてハマシギをとりあげ，旬別平均個体数をグラフにしたもので，一見してその渡来の型の違いがわかる。

ところで，同じ鳥でも調査場所の広さや採餌適地の広さによって渡来数には大きな差がある。そこで**第2表**を見てみよう。これは春秋型のチュウシャクシギのグラフだが，東京湾と大阪湾で渡来数の違いこそあれ，渡りの型としてはほとんど同じ傾向にあることがわかる。つまり春の最高はどちらも5月中旬であり，秋の最高は東京で9月中旬，大阪でも9月上旬とほとんど違いがないのである。

第3表は，キアシシギの渡来数を同一場所で時をへだてて比較したもので，年月は変わっても渡りの型にはほとんど変わりがないことがわかる。つまり春の最高は5月中旬，秋の最高は8月中旬だ。

第4表は，アオアシシギの例である。1950～1956年の大阪，1955～1957年および1967年の行徳の記録をくらべてみると，それぞれに数の違いや多少の時期的なずれはあるにせよ，ほぼ同じ秋春型を示し，しかも，他の種と違い，秋の渡りに際して3つの山をもつグラフとなっている。

第5表はツルシギのケースで，春の渡来は他の種よりも早く3月上旬に始まり（年によっては2月下旬に初認されることもある），急に渡来数を増して多数が見られるが，秋にはごくわずかしか現われない典型的な春型である。これに対し，秋に数百羽渡来するが春にはほとんど見られないというような明確な秋型の例は，日本にはない。日本で秋型と考えられているキリアイ，ヘラシギなどは，秋の個体数もそう多くなく，ふつうは10羽前後なのである。ただし，1969年秋のようにキリアイの渡来数が著しく多く，千葉県上総一の宮で毎回500羽前後を数えた例があり，この年にかぎっていえば，典型的な秋型になる。タカブシギ，オバシギも秋型といえるが，その後渡りの型が変化している（後述）。

渡りの型の考察

1　春の渡りと秋の渡りの型の違い

春の渡りは，大部分の種では急に数を増して短い期間に渡去する。しかし秋の渡りでは，期間が長く，種によっては2，3のピークをもっているものもある。この秋の渡りにおける波は，成鳥と幼鳥の群れの渡来期がずれるためという説もあるが，日本には確かな資料がないのでなんともいえない。すでに**第4表**で見たとおり，アオアシシギの秋の渡りに3つの波がある点は興味深く，成鳥，幼鳥の区別を考慮しながら観察することが望まれる。また，メダイチドリについても同様のことがいえる。

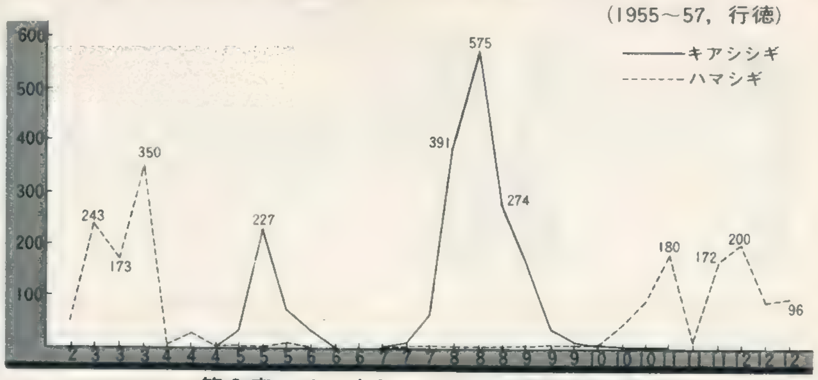
春に波のある種では，2か所以上の繁殖地のものが混ざっている可能性が強いとも考えられるが，その点も日本の場合は確かではない。ハマシギ（**第1表参照**）では，日本で越冬しているものと南のほうから渡ってくるものとがあるから，その点で春の渡りのグラフも複雑になるのであろう。また一般に春の渡りの期間が長いものはより広い繁殖地域をもつといわれるが，日本の春の渡りでは，とくに長い期間滞在するものはない。

2　場所による渡りの型の違い

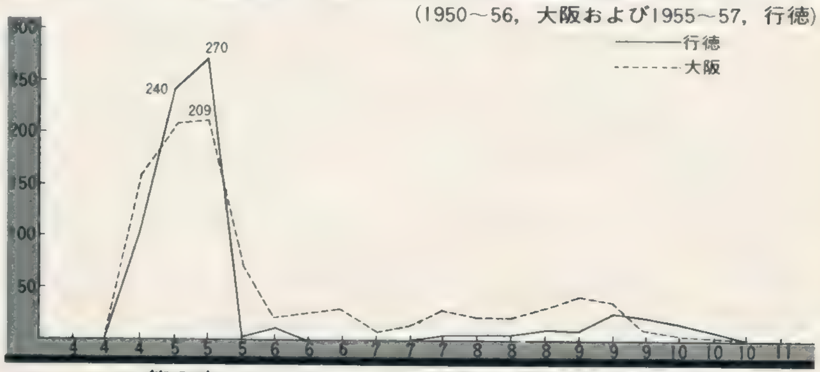
第6表で示されたように，大阪ではトウネンは秋春型の渡りであり，秋の渡りの代表者はトウネンであるとさえいわれている。ところが行徳においては，春のほうが秋よりも渡来数が多く，明らかに春秋型といえる。このことは資料3によっても同様で，1967年行徳における渡来数は，春の5月7日が最高の1018羽であるのに，秋の最高は8月20日の368羽に過ぎない。さらに資料1と2を比較すると，行徳では春多数のツルシギが渡来しているのに，大阪では少数のものしか記録されていない。またキョウジョシギは

*

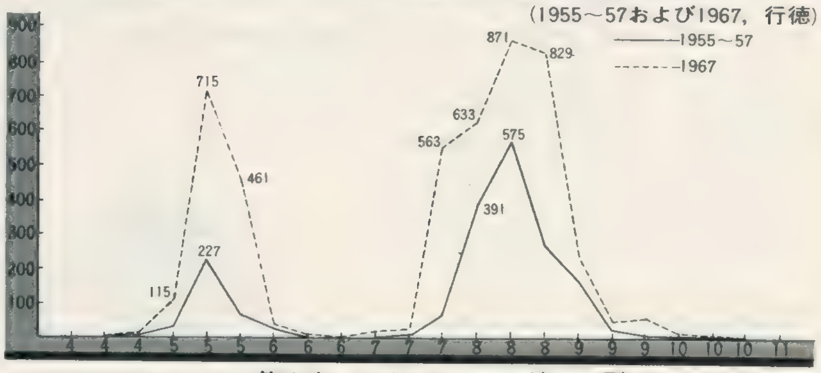
第1表　キアシシギ（旅鳥型）とハマシギ（越冬型）の渡りの型の違い
（1955～57，行徳）



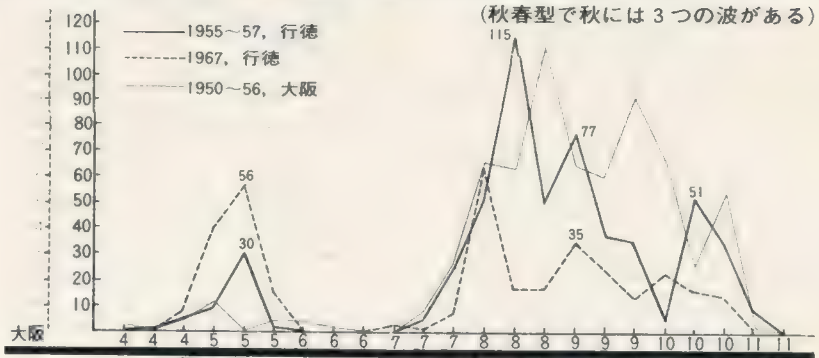
第2表　チュウシャクシギの春秋型の渡り
（1950～56，大阪および1955～57，行徳）



第3表　キアシシギ（秋春型）の隔たった年の比較
（1955～57および1967，行徳）



第4表　アオアシシギの渡りの型
（秋春型で秋には3つの波がある）



第5表　ツルシギの旬別平均個体数（行徳）
（春には多数渡来するが秋には非常に少ない）

月	1			2			3			4			5			6		
旬	上	中	下	上	中	下	上	中	下	上	中	下	上	中	下	上	中	下
1955~57	0	0	0	0	0	0	0	32	44	198	200	242	209	10	0	0	0	0
1967年	0	0	0	0	0	0	5	273	524	840	898	478	611	610	1	0	0	0

月	7			8			9			10			11			12		
旬	上	中	下	上	中	下	上	中	下	上	中	下	上	中	下	上	中	下
1955~57	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	2	0	1	0	0	0	0	0
1967年	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	1	0	0	0	0	0	0	0

生きものの世界への疑問 9 系統樹の幻想 日高敏隆

前成的なもののなかに後成的なものがはいりこむ進化という現象は，どうも今まで考えられていたほど簡単なものではなさそうである。

進化がしごく簡単に起こりそうな印象をわれわれに与えたもののひとつは，有名なヘッケルの系統樹であるような気がする。高校の生物の教科書の表紙の裏には，原生動物にはじまって，1本の樹木のように枝分かれした進化の筋道が描かれている。

ダーウィンの進化論に感激し賛同したヘッケルは，自分の発生学の知識に基づいて，有名な〝個体発生は系統発生を繰り返す〟という発生反復説を立てた。つまり，ある動物の個体が受精卵から出発して親のからだに育っていくプロセス（個体発生）は，その動物の種の進化の歩み（系統発生）の省略された繰り返しなのであり，したがって個体発生の途上でその個体がとる形態は，その動物の祖先の姿の思い出なのだというのである。

ヘッケルはこの説に基づいて，いろいろな動物の進化の筋道を再構成してみようとした。それは多くの収穫をもたらした。たとえば，現在ではまったく似ても似つかない軟体動物と，ゴカイやミミズの仲間である環形動物とが，その卵からの発生過程でどちらもたいへんよく似た形の幼生段階をへることから，きわめて縁の近いものであることがわかった。したがってこのふたつの動物群は，同じ祖先に由来しながら，ふたつのまったく違う体制に分岐してきたものだといえる。

こういう方法でヘッケルは，単細胞の祖先から人間へいたる進化の歩みを，壮大な系統樹に再構成した。この系統樹はいかにもわかりやすかったので，進化を目前にありありと見るような印象を与えた。系統樹は人びとの心に浸透した。そして，そのうえで欠けている部分の探索がはじめられるなど，系統樹を指針として動物の類縁関係，系統進化などの問題が解きほぐされていった。



けれどそれは大きな誤解も生んだ。たとえば，系統樹の根もとに近い原生動物や腔腸動物は，きわめて素朴に〝原始的〟で〝下等〟なものと信じこまれ，人間に近づくにつれて，より〝高等〟になると考える風潮が，人びとの頭にしみついてしまった。もちろん，人間はそのもっとむかしから万物の霊長と考えられていたから，系統樹の上でももっとも上位にくる。こうして，いま生きている動物を下等から高等に並べて，それが進化の歩みを示すものだという解釈が定着してしまったようにみえる。ヘッケルは功罪ともに大きいが，系統樹に由来するこの誤解は，もっとも大きな影響を残したように思われる。その影響は生物学にとどまらず，広く社会思想全般におよんでいる。あるいはむしろ反対に，社会思想がそのようなものになっていたから，ヘッケルの系統樹が一気に受けいれられたのかもしれない。

進化の跡はたどれるか

とにかく，系統樹でいちばん問題になるのは，いま，現に存在するいろいろな動物を進化という時間的な系列に並べてしまったことである。文化人類学における同じような誤ちは，レヴィ＝ストロースによってきびしく批判されたが，生物学においては，もっと早くから系統樹批判が起こっていた。その要点は次のとおりであり，これが進化の理解と深い関係をもっている。

ヘッケルのはじめの考えでは，ある動物は，その祖先の親の形態を次々に経過して発生していくものとされていた。けれど，ド・ベーアをはじめいろいろな発生学者が指摘したとおり，実際はそのようにはなっていない。ある動物の個体発生のプロセスは，祖先の胚や幼生の状態を次々にへていくのであって，決して祖先の親の形態を踏んでいくのではない。

こんにち用いられている系統樹はこの修正に基づいて描かれている。つまり，どの動物群も木の幹の上や大枝の上にはのっておらず，そこから分かれた小枝の先に位置しているのである。いいかえれば，実在の動物群は，どれもみな袋小路のいきどまりであって，それを通って次の動物群が生じたようには描かれていない。むかしの考え方によれば，たとえば腔腸動物は木の根もとに近い主幹の上に描かれている。それはどういうことを意味するかといえば，原生動物，海綿動物を除く他のすべての動物は，〝腔腸動物そのものをへて〟進化してきたということである。それに対し，腔腸動物が幹から側方へ出たわき枝の先に位置しているということは，腔腸動物はひとつの特殊化した動物群であって，進化は〝腔腸動物そのものでなく，それにたいへん近いものをへて〟起こったことを示す。

この違いは重大である。系統樹の幹や

カラーページ解説

＊

東京，大阪とも春秋ともに多く渡来する春秋型の普通種だが，九州各地においては，ごく少数が見られるのみである。これらの場所による違いは何によるものか，よくわからないが，トウネンやキョウジョシギの場合，渡りのルートを考えるうえで，ある暗示を与えるようにも考えられる。

キョウジョシギは，脚環をつけて放つ実験の結果，アラスカのプリビロフ諸島から千葉県行徳へ多くの個体が渡来していることがわかった。日本に渡来するシギ・チドリ類は東北シベリアで繁殖するものであろうと考えられていたから，アメリカ大陸からの渡来を証明するものとして興味深い。それだけに，日本から南方へのコースも正確に知りたいと思う。

3　年による渡りの型の違い

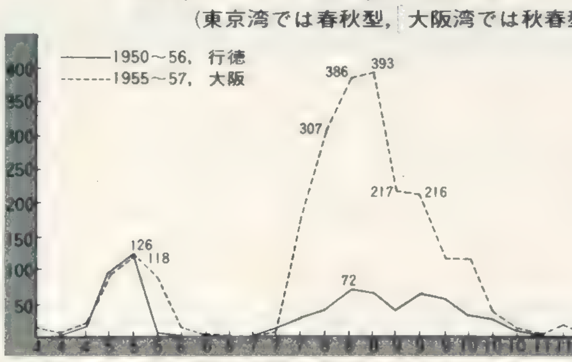
1955～1957年の資料と1967年の資料によって，千葉県行徳におけるタカブシギの渡来数を示したのが，**第7表**である。

これによると，1955～1957年には春にはまったくタカブシギを見ず，秋にわずかに1～3羽を見たにすぎない。ところが約10年後の1967年では，春にもタカブシギの渡来があり，5月上旬には26.5羽（平均）が見られ，8月中旬にはなんと211羽も数えられて，秋春型の渡りになっている。この場合も，タカブシギ全体の数がふえたのか渡りのルートが変わったのか，不明であるが，日本にくるタカブシギが多くなったのは確かである。行徳だけでなく，日本各地のシギ・チドリ類の渡来地ではやはり数がふえているし，従来見られなかった小さな川，水田，水たまりなどでもふつうにタカブシギを見るようになった。

1959年の秋に同じ行徳で40羽の群れを見て珍しいとノートに書いてあるから，そのころからふえだしたのであろうか。アジア全体，またはヨーロッパのものについても，タカブシギの増減を調べたらおもしろかろう。

渡りの型が変わったもうひとつの例にオバシギがある。資料2によれば，行徳におけるオバシギの渡りは，個体数は多くないが秋春型である。資料1による大阪における渡りも同様である。ところが行徳においては，1959年春に突然多

第6表　トウネンの場所による違い
（東京湾では春秋型，大阪湾では秋春型）



第7表　タカブシギの旬別平均個体数の増減（行徳）
（10年間に渡来数が著しく増した）

月	1			2			3			4			5			6		
旬	上	中	下	上	中	下	上	中	下	上	中	下	上	中	下	上	中	下
1955~57	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
1967年	0	0	0	0	0	0	0	0	1.0	2.5	1.0	15.5	26.5	4.0	0	0	0	0
月	7			8			9			10			11			12		
旬	上	中	下	上	中	下	上	中	下	上	中	下	上	中	下	上	中	下
1955~7	0	0	0	0	1.1	0	1.3	2.3	2.0	0.2	0.1	0	0	0	0	0	0	0
1967年	22.5	36.0	145.5	142.0	211.0	97.0	17.30	100.0	33.0	38.0	26.0	30.0	2.0	1.0	0	0	0	0



大枝の意味がまるで違ってしまうからである。つまり，むかしの考えでいうと，実在の動物群はまさに〝進化の跡〟を示すものであり，大枝はそれをつなげた現実の線になる。けれど，あとの考えによる系統樹では，実在の動物群はすべて特殊化した存在であり，系統樹の大枝は架空のものになる。そして，ヘッケルに対する批判は，後者のほうが実際の姿に近いことを指摘したのである。

両生類は魚から進化した。けれど，よく知られているとおり，今の魚が両生類に進化したわけではない。魚類の一部からとうのむかしに両生類が生じており，今われわれが見ている魚らしい魚は，その後になって〝魚として〟特殊化してきたものである。

両生類から爬虫類ができた場合についても，爬虫類から鳥類や哺乳類が進化した場合についても，まったく同じことがいえる。カエルは特殊化した両生類であって，両生類から爬虫類が生じたあとでできてきたものである。ヘビやトカゲも同じことだ。両生類全体が爬虫類出現のステップになっているのではない。だから，系統樹の大枝の上に両生類を位置させることはできないのだ。それはあくまで，わき枝の先端にしか位置していないのである。

すると，系統樹の大枝，つまり進化のたどった経路はどういうものであったのだろうか？　それがかいもくわからなくなってくる。

そこでなんとかして，実際の進化をなしとげた動物，ほんとうに進化の大道の別れ道に立っていた動物の化石が欲しくなる。だが前にもいったとおり，それはほとんど見つからないのである。いったいどういうことが起こっていたのか。

〝あともどり〟の進化

ガルスタングはド・ベーアの考えをさらに進めている。進化はひとつの種から別の種ができることであるが，それぞれの種は，上に述べた動物群がみなそうであったように，どれもひとつの袋小路である。したがって新しい種は，既存の種の親から生じたのではなく，その幼体から生じるはずである。つまり，もし，細部の系統樹を描いたとすれば，ひとつひとつの種は１本の枝から横に出た小さい枝の先端に位置している。この小枝はその種が胚から幼体をへていく経路を示すと考えてよい。すると次の新しい種は，この小枝がさらにのびてその先に生じるのではなく，一度〝あともどり〟をして，太い枝にかえり，それが少しのびて，そこからまたわきに小枝を出し，その先端に生じるという形で出現してくるはずである。この考えはガルスタングの幼形進化説と呼ばれている。



この考えによれば進化の筋道や別れ道を示す化石というものは存在しないはずである。そして太い枝はつねに架空のままに残されるはずである。案外これが現実の姿なのではあるまいか？　もしそうだとすると，進化はプラスアルファの方式で起こったものとは考えにくくなってくる。プラスアルファ方式で進化が起こったのなら，ヘッケルの系統樹でよいはずであろう。そして，進化の別れ道を示す化石も，もっとたくさん見つかってもよかろう。さらに，そのようにして，よりよいものが生じてきたのなら，系統樹の〝下の〟ほうに位置させられている〝下等な〟動物は，より不適応であったがゆえに，とっくのむかしに地上から姿を消してしまっているはずだ。しかし，これらはいずれも現実の姿と矛盾する。

ケストラーはガルスタングの考えに基づいて，〝胚淘汰〟ということをいっている。つまり，淘汰は変異個体が生まれてきて，それが生きていく途上で働くものではなく，上に述べた〝あともどり〟とその上に立った飛躍の過程，すなわち新しいものの胚の段階で作用するのだというのである。

〝あともどり〟ということは，既存の種の胚がそのまま既存のプログラムにしたがって親になっていくことの否定である。古いプログラムは否定され，まったく違った方向へ向かう新しいプログラムがつくられるのだ。この新プログラム編成は難事業である。それは首尾一貫していなくてはならず，それなりにひとつの完結性をもっていなくてはならない。どこかで矛盾を含んだプログラムをつくった胚は，そこで，その矛盾ゆえに死んでしまう。つまり胚淘汰が起こるのだ。

こうした莫大な数の試みと淘汰が行なわれた結果，やっとひとつの新しいプログラムが完成し，新しい種が出現する。そうなると，その新しいプログラムはたいせつに〝守られる〟。つまりそれからの逸脱は，胚淘汰とともにこれまでいわれている淘汰によってもきびしくふるい去られ，種の不変性が保たれていく。

これは仮定の話である。しかし，プラスアルファの思想よりは，現実の生物界の姿に近いように思われる。だが，その実体を，われわれはまだほとんどつかんでいない。■　（東京農工大学教授）

イラスト・後藤喜久子

カラーページ解説

数のオバシギが渡来し，最高数87羽を数え，その後も春，多くのオバシギが渡来する傾向は変わらず，1963年100羽，1965年60羽，1966年103羽などの記録があり，資料３においても1967年４月30日に87羽，５月７日に147羽が数えられている。オバシギは1959年から春秋型の渡りに変わったのである。しかし，この傾向が全国的なものかどうかは明らかでない。ちなみにこのオバシギの春季多数渡来とともに，その群中に数羽のコオバシギを見るようになった。

4　種による渡りの時期の違い

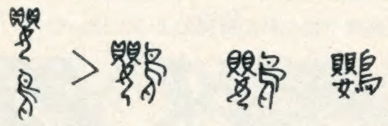
資料４によると，イギリスのケンブリッジ汚水処理場では春と秋の渡りの間隔は，繁殖地が同緯度の場合はからだの大きいものほど大きく，からだの大きさがほぼ同じものでは，より北に繁殖地をもつものほど大きいという。しかし日本ではあまり顕著に認められない。これは調査地と繁殖地との距離による違いであるとも考えられる。繁殖地により近いイギリスにおける渡りのほうがより繁殖地の影響を受けやすいのではないか。

またヘミンセンは中国東北部において，春早く渡る種類は秋おそく渡来することを発見したというが，ニスベットによれば，イギリスではこのことは明らかでない。日本では，春の渡来の最盛期が早く秋におそい例としてオオソリハシシギとタシギがあげられるが，その他のおもな種のあいだには，明確な違いはないようである。春の渡来期の早いツルシギの秋の渡りがあまり顕著でないため，その点がはっきりしないのは残念である。ただ，11～12月の比較的おそい記録が，散発的ではあるが多いように思われる。

以上のように，日本におけるシギ・チドリ類の渡りについては興味深いことが多いが，その繁殖地との関係や変化の原因などについてまったく不明であるのはまことに残念だ。また，シギ・チドリ類の渡りについて多くの資料を提供してくれた千葉県行徳の渡来地が，干拓などによりまったく変わりはててしまったことも残念である。■　（日本野鳥の会理事）

漢字のふるさと　75

藤堂明保



鸚哥（いんこ）　前回の鸚鵡（おうむ）の仲間だが，形はひと回り小さい。そこで哥（あんさん）という愛称をそえて，鸚哥という。今の北京語でも鸚哥児 yīngger という。

鸚鵡の解説をした際，鸚とは「首のまわりに貝のアクセサリーをめぐらしたような鳥」という意味だと説いておいた。嬰とは「貝印ふたつ＋女」を組みあわせて，貝をつらねた首飾りをつけた女の子を表わしている。ところで「おうむ」のほうは，たけだけしい感じ（＝武）を伴うので鵡という一語をそえたが，「いんこ」はむしろ「首巻きをしたイキなあんちゃん」に見える。そこで「哥」という語をそえて鸚哥と呼んだのだ。

鸚哥は唐代には ieng ka（エイカ）と発音したが，13世紀以降，南宋・元・明とくだってくると，ing ko（インコ）と発音されるようになる。鎌倉時代の僧か室町時代の商人か，そのあたりの連中がこの新しい種類を輸入して，それと同時にインコという中世の発音を日本にもたらしたのである。■



サクラブンチョウの雌雄鑑別

〈問〉　サクラブンチョウの雄，雌はどこで見分けるのでしょうか。

（立川市砂川町・近　仁美）

〈答〉　小鳥の雄と雌の見分け方についてのご質問は，比較的多く，いままでにジュウシマツ（20号）とセキセイインコ（29号）をとりあげたことがあります。雄・雌の見分け方は非常にむずかしく，動物園でもてこずっていて，とくに熱帯産のオウム類で，１羽しか入手できなかったものなどは，いまだに雌雄を決めかねているほどです。

身近な小鳥でも例外ではなく，外型から即座に断定できるもののほうが，かえって珍しいくらいです。ですから，どうしても経験から「雄はこんなしぐさをするから」というしかないのが現状です。

ご質問のサクラブンチョウの雄・雌の区別のしかたですが，わたしはだいたい次の点をめやすにしています。

ブンチョウ類は，孵化後４か月ほどで，ひな毛から親毛にかわる換羽期にかかります。その少し前あたりに，ひな鳥はよく，ひなたぼっこをしながら，肩を震わせ，「グチョグチョピッピッ」といわゆる〝さえずり〟の練習をしはじめます。これは，明らかに雄の特徴です。成鳥になって，さえずれば，まちがいなく雄です。

外観からの見分け方は，雄はくちばしやあしの血色がよく，赤色の濃いものやくちばしの大きいものが雄です。この見分け方はシロブンチョウにも共通です。■



レースバトの外傷

レースバトはいろいろなことでケガをすることが多く，その程度によっては落鳥することもありますが，ふつう，外傷には比較的強く，ほっておいても自然に治癒する場合もかなり多いものです（病気については本誌46号参照）。

鳩舎内での外傷は，ネズミ，ネコなどの動物によるもののほか，仲間につつかれたりする傷，巣棚から落ちて骨折するひななどあります。

巣びなや若バトが他の仲間の鳥に頭をつつかれケガをすることがありますが，その傷もただ充血した程度のものから，頭皮をはがされ目のなかまで出血し，失明してしまうほどの傷を受けることもあります。

傷の軽い場合には，ヨードチンキを塗る程度でなおりますが，注射や手術を必要とする場合もあります。

鳩舎内にネズミやネコが侵入し，爪傷や咬傷を受けることがありますが，これら動物による傷は，表面上はたいした傷ではないようでも，やられた直後か，数日後に突然落鳥することもあります。

ネズミやネコのつめや歯は不潔で，爪傷や咬傷が細菌の侵入口となり，数日後に敗血症を起こすことがあるからです。

また，やられた直後に落鳥するものは，ショックか出血多量が原因のことが多いのです。

以上のように動物による外傷の場合には，敗血症予防の意味で抗生物質の注射をしておくとよいです。

骨折をするケースも多く，とくに舎外訓練中やレースの途中，飛行中に電線などにひっかけ骨折する場合が多いのですが，電線にぶつかった場合，そのあたったときの速度や部分によって症状がいろいろ変わってくるものです。

くちばしに電線などがあたり，上くちばしや下くちばしが折れ曲がってしまうこともあり，首にあたり，内出血がひどく気嚢が破れ，皮下に空気がたまってゴムマリのようにふくれてしまうこともあります。

嗉嚢の部分に電線があたって破れると，なかにはいっているえさ粒が出てしまい，飲んだ水もそのまま傷から出てくるようになります。嗉嚢が裂けた場合には縫合をしてやる必要がありますが，必ず縫合する際にはその嗉嚢と皮膚を別々に縫合してやらねば傷口がきれいに癒着せず，せっかく縫合しても再び腐って孔があいてしまいます。縫合した糸は後日抜糸する必要はなく，傷口にはマーキュロ等を塗布します。化膿止めの内服薬や注射を施せばさらに完全な治療法といえます。また，胸の部分に電線があたると，竜骨の正面が砕け，皮膚が切れ内出血のため紫色にはれます。

あしの場合，つけ根の部分が裂けてくることが多く，内股を縦に裂かれ，股関節の半脱臼，脱臼をともないあしは力なくぶらぶらになります。さらにあしの骨折の場合，片あしの場合が多いのですが，ときには両方のあしを折ってくることもあり，骨折部分としては脛骨，跗骨に多く，股骨の場合はまれです。骨折の治療法としては，副え木をあててテープで押え，10〜14日間ほど固定しておけば治癒するものです（「小鳥のあしの骨折」82号参照）。リングのはまっている部分を骨折したときには，リングを切りはずしてやらないと，骨折部が腫脹してリングのために血行が悪くなり，あしが腐ってしまうことがあります。■



（小鳥の病院院長）



東京の奥座敷に野鳥天国

東京都福生市の東南部，多摩川寄りの田園地帯の北側に，小高い丘があり，針葉樹林や雑木林が屏風のように続いている。そのため四季を通じて，珍しい野鳥たちが繁殖し，また渡り鳥も豊富だ。

冬はチョウゲンボウ，ユリカモメ，ウソ，カシラダカ，ジョウビタキなどがおり，春夏にはアオバズク，ホトトギス，ツツドリ，カッコウなどが競って鳴いている。フクロウ，トビ，ノスリ，オオタカ，ハイタカなども見られるし，オナガ，カケス，スズメ，ムクドリ，キセキレイ，セグロセキレイなどは，たくさんいる。そして夜になると必ず近くの小川をカモたちが往復している。



このように，近年鳥の数がふえたのは，現地が鳥獣保護区に指定されたことも，ひとつの大きな原因と思われる。そして，うれしいことには，ハンターは出入りできないために，キジ，コジュケイが雑木林のなかで繁殖しはじめている。キジは昨年の春には２羽でいたのが，ことしは５羽にふえている。親子そろって田園の草原にえさを食べにくる光景は，かわいらしく，そして美しい。ときどき，かれらは「ケン，ケエン」「ケン，ケエン」と鳴く。

わたしは，キジの仲間が木の枝にとまるところをあまり見たことがないが，これは雌親が１羽，スギの枝にとまり，そのまま数十分もそうしていたときに撮影した写真である。■

（東京都・岡　董高・野鳥の会会員）

裏表紙説明

クロハゲワシ　ハゲワシといえば旧世界に暗躍する腐肉食の猛禽。新世界に君臨するコンドルの一味とともに，世界を二分する〝空の葬儀屋〟として名高い。

わが〝東洋の君主国〟日本は，古来，このような殺伐とした勢力とは無縁であった。ところが，1972年12月８日，ツルの渡来地として知られる鹿児島県出水市の荒崎海岸に，突如として１羽のクロハゲワシが姿を現わしたのである。ツルは興奮にうち震え，カモたちは紙吹雪のように飛びまわる。カラスは果敢にも撃退作戦に加わり，人間は人間で，すわ，ハゲワシ一味の日本進出，ひいては世界征覇に向けての第一陣かと取りざたする。だが，当のクロハゲワシは，そんな騒ぎをよそに，全長１メートル余，つばさをひろげると３メートルにもなる黒褐色のからだを陽光に無気味に輝かせ，やがていずこへともなく飛び去っていった。

もともとバルカン，小アジア，中央アジアにしかいないこの鳥，専門家によれば「動物一般に見られる，気まぐれな若者の長旅」ということだが，あるいは，世紀末的様相を呈したこの国に，死臭をかぎとったのかもしれない。だが，この死臭たるや，もはやこの鳥にすら耐えがたいほどのものだったのだろう。同じものと思われるクロハゲワシが瀕死の状態で保護されたのは，それからまもない12月25日，熊本県球磨郡の万江川の川原でのことであった。■　撮影　山本要一

▶訂正　100号表２翻訳者名は加藤尚宏氏の誤りでした。

次号予告

3月21日発売



ユリカモメのコロニー

世界動物百科
105号　4／1

カラーページ

カモメ亜目
トウゾクカモメ科　オオトウゾクカモメ
カモメ科　オオカモメ，セグロカモメ
ウミネコ，ユリカモメ
ニシズグロカモメ，ミツユビカモメ

私たちの仲間

自然と人間 2 暮らしを支える汚れた大地	編集部
アマゾンにチンパンジー？ アマゾン動物記 17	伊沢紘生
オオセグロカモメの親子のきずな カラーページ解説	狩野康比古
生きものの世界への疑問 10（最終回） 進化主義の思想	日高敏隆
漢字のふるさと 76 鴎（かもめ）	藤堂明保

第65号～第128号（鳥類）のおもな内容

◉ 数字は号数，白ぬき数字は既刊

第1号～第64号（概説・哺乳類）のおもな内容

本誌の購読について

本誌は，全国の書店，朝日新聞販売店で取り扱っております。

毎週定期的に，配達をご希望されるかたは，お近くの，取扱店にお申込み下さい。

なお，本社直接購入のご希望のかたは，下記あてお申込みを願います。送料は，1部につき30円です。

朝日新聞東京本社出版業務部
東京都千代田区有楽町2－3　〒100
TEL. 03―212―0131
朝日新聞大阪本社出版業務部
大阪市北区中之島3－3　〒530
TEL. 06―231―0131
朝日新聞西部本社販売部出版業務課
北九州市小倉区砂津1―12―1　〒802
TEL. 093―531―1131
朝日新聞名古屋本社販売部出版業務係
名古屋市中区栄1―3―3　〒460
TEL. 052―231―8131

世界動物百科　通巻105号　昭和48年3月25日発行（毎日曜日発行）　編集・発行人　大田信男　発行所　朝日新聞社　東京　大阪　北九州　名古屋　印刷・凸版印刷　**定価220円**



クロハゲワシ　　説明30ページ